



第 93 号

公益財団法人 黒田奨学会

人 権 蒸 発

— 存在を否定された国民 / 失意と尊厳 —

川瀬 輝彦

はじめに

内戦で国外に逃れた避難民、干ばつで砂漠化した農地を捨ててさまようアフリカの農民、宗教対立や部族紛争で国を追われた人々。これらはテレビや新聞で報道され、世界に救援を訴えますし、私たちもその苦境を知って街頭募金をすることもあるでしょう。

一方、私たちの身近にも家を持たず、毎日野宿して生きているホームレスたちが全国に約3,500人、福岡市には200人います。(2022.4.26厚労省「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果について」より)

更に、ネットカフェや漫画喫茶で暮らす「ホームレス予備軍」を入れると倍の人数になるようです。しかし難民のように同情は集まらず、「怠けないで、しっかり働きなさい!」と冷たい眼差しが浴びせられます。難民は自分ではどうしようもない災難により今の境遇になった人たちだが、ホームレスは自業自得で今の境遇に堕ちた人たちとの、悲しい誤解が社会に蔓延しているからだと思います。家を失った途端、当たり前にあると思っていた国家からの様々なサービスは消え、「人権蒸発」の状態となってしまう、「ホームレス蟻地獄」から抜け出すのは至難の業なのです。



1. なぜホームレスになってしまったか

ホームレスの中には何か月も風呂に入らず、髪の毛は伸び放題で汗と脂でごわごわ、衣服もドロドロの異様な感じの人をたまに見かけたことがあるかもしれません。このような人は、何らかの精神的な失調のある人で、今から話すホームレスのイメージから外してください。

普通のホームレスは、毎日コンビニで弁当やお茶、缶コーヒーを買っていますが、あなたの前に並んでいてもホームレスだと気づくことは無いでしょう。

厚生労働省の2021年11月の調査では、ホームレスになる前は正社員46%、非正規23%と、週5日程度働いていた人が全体の約70%でした。つまり、収入は多くなかったかもしれませんが、ほとんどの人がアルコール依存症などの精神的な失調を抱えた人でもなく、働く能力に困難を伴う人でもなく、普通の勤労者でした。

働いていた会社が倒産した後も社宅に住んでいると、ある日突然玄関のカギが取り換えられてしまつて入れない(もちろん違法です)。ドアに貼られた連絡先に行つて家の鍵を開けてもらい、持ち出せるものだけ持って途方に暮れますが、頼れる友人や親族もいない。家から追い出された者には、弁護士の所に相談に行つて…などの、合法的に家を取り戻す余裕など時間的にも経済的にもなく、泣き寝入りするしかありません。

このように法律はあつても、それが機能しないところからホームレスの不幸は始まるのです。

アルバイトをしながらネットカフェに寝泊まりしているうちに体調を崩すようなことがあると、働ける日が減つて次第にネットカフェにも泊まれなくなる。こうして公園や橋の下で寝るホームレス生活に追い詰められるのです。決してダメな人、仕事の能力が低い人などがホームレスになるのではなく、ごく普通の人たちが家を失った途端、その人の人権は蒸発して消果て、ホームレスになるのです。

2. なぜ働かないのか？

まず今の世の中、携帯電話無しにアルバイトにありつくことはできません。ある日、公園の炊き出しの列に並んでいる若者に会いました。まだ家の有る人でしたが、年寄りばかりの列で自分のような若い人はおらず、並ぶのが恥ずかしいけれどアルバイトも減って、少しでも食費を浮かすためには炊き出しの列に並ぶしかない。

食事をとらなくても携帯代だけは支払わねばと、電話を止められてアルバイトにありつけなくなって家も失ってしまうと言っていました。携帯電話が家を確保する生命線なのです。また、一般の事業所は面接して採用通知を送る際に「今、家が無いのです。」と言って「ああそうですか。」とはなりません。健康保険証等の身分証明になる物が無ければ敬遠されて就職は困難です。

それならば生活保護があるではないかと思うかもしれませんが、家、つまり「住所」が無ければ生活保護を受けることは出来ません。生活保護は、住所地を管轄する福祉事務所が受け持つことになっているので、「あなたは、ここの福祉事務所で扱う対象ではない。」と、拒絶されるのです。

ジョギング中に立ち寄る公園に、あずまやで寝起きしているホームレスがいました。閑静な住宅地で、周囲の住民に嫌われないよう毎日公園を掃除したり、夜に中学生たちがタバコを吸っていると注意したりして、まるで公園の管理人のように住民たちに信頼されていました。冬の日、彼は熱を出して風が吹き抜けるあずまやで寝込んでいました。

私は仕事を半日休んで車に乗せ、生活保護受給者が多く通う病院に連れて行って診てもらいましたが、冷たい風が吹きすさぶあずまやで寝ておくしかないことを説明しても、「入院するほどの病状ではない」と言われ、入院は認められませんでした。

その病院のことを薄情だと思いましたが、よく考えると病院には病院の事情があり、もしもアルコール依存性などで周りの入院患者とトラブルになってもまずいし、何よりホームレスでは信用が無いのだと分かりました。

それから半年くらい経った頃、その公園に立ち寄ると彼はもういませんでした。近所の住民が言うには、ひどくうなづいて具合が悪そうだったので救急車を呼んで入院し、その後は生活保護でどこか遠くに住んでいるらしいとの事でした。救急車で病院に担ぎ込まれなければ認められないほど、ホームレスにとって生活保護の壁は厚いのです。

3. どうやって生きているのか

では、どうやって食べているかというと、ホームレスは働いています。(前述の2と矛盾しますが)

建設現場の日雇仕事がある日はそこで働き、この仕事が無い日は自転車でアルミ缶を集めて金属回収業者の所に持って行くと、一日で1,200円～1,500円くらいになるそうです。(今はアルミの値段が倍になっているようなので、もっと多いかもしれません。) これで弁当を2食買い、お茶か缶コーヒーなどで毎日生きています。

ホームレスが多く加入している日雇労働組合からの建設現場の仕事や、仲間から紹介された仕事など、アルミ缶集めの外にもいろいろと収入のあてはあります。毎日同じようなルートを回ってアルミ缶を集めていますが、そこで知り合った主婦から庭の草取りを頼まれたり、家の中の大量のゴミを搬出して捨てる仕事を頼まれるなど、信用されて仕事を頼まれることもあるそうです。不審者だの怖い人だのと言われますが、ホームレスはアルミ缶集めなどで安定収入があるので犯罪を行ってまで金を得ようとはしません。怖い人どころか、むしろ気の弱い人たちです。

最初は どうやって生きて行けばよいのか分からずに途方に暮れているホームレスも、公園の炊き出しの列などで仲間から情報を集め、少しずつ生きる術を身に付けていきます。それぞれの公園の炊き出しの日時、どこに行けば服や市販薬がもらえるか、自転車はどこでももらえるか、アルミ缶はどこに行けば買ってもらえるかなどです。

4. 公園の炊き出し

いろいろな団体が、あちこちの公園で炊き出しやパンなどの食糧を配布しています。何度か公園の



公園の炊き出しの列

炊き出しに行きましたが、見てみるとノラ猫にエサでもやる感じのご婦人たちや、炊き出しに並んでいる人たちのことを、がんばって更生して働くようになってほしいと、貧乏を犯罪と勘違いしている善意のボランティアたちもいました。公園の炊き出しや食糧配給が良いのは、普段は別々に散らばっている知り合いたちが一度に集えることです。お互いの安否を確認したり相談事をしたりで、コミュニケーションの場になっています。

また、お盆には夏祭り、年末年始には団結越冬大会と称して、公園で3日間日雇労働組合の仲間たちが寝泊まりしてお祭りをやっています。ただ楽しくお祭りをやっているのではなく、この二つの時期には建設現場が休みになって日雇の仕事が無くなります。みんなで食いはぐれないようにということと、冬には本当に路上でお腹を空かせたまま死ぬことがあるので、このようなお祭りをしています。

お寺などあちこちからカンパしてもらった食材に街頭募金で集めたお金を足して、ボランティアの調理師がやってきて大鍋で料理してくれますのでなかなかの味付けです。ビールやジュース等もあり、そのほかゲームや映画、くじ引き以外にも、医師による健康相談や司法書士の法律相談もあります。ちなみに天神でやっていたこのお祭りのための街頭募金が、私とホームレスとの出会いでした。



夏祭り（昼間）



夏祭り（夜間）

5. 年金受給権があるのに年金がもらえない

知り合いのホームレスから「受給権があるのに年金がもらえない」と言われ、何かのマチガイではと思いました。私は県庁に勤めていた時よく年金手続業務を行っていたので、自分が手伝えらえるようになると軽く思って社会保険事務所に問い合わせましたが、住所が無いと受け付けられないと言うのです。このようなことは生活保護でもそうですし、国民健康保険、失業保険などでもです。

要するに、日本国憲法に定める「国民として健康で文化的な生活」が保障されるのは「住居を持つ国民」だけなのです。写真を撮ってサインを登録して本人確認カードを作り、福祉事務所を仮の住所にすれば簡単に解決する話のように思えるのですが。

ホームレスたちは社会の役に立っていないと蔑まれますが、公園の一角に寝床を貸してもらう以外は、社会から給付を受けていません。その反面、消費税、酒税、たばこ税は支払っています。そして、ホームレスたちもこうなる前には、普通に働いて普通に税金を払っていたことを社会のみんなが忘れてしまっていることが問題だと思います。浜辺の貝を拾えば漁師、山のキノコを取れば農家です。しかし、アルミ缶を拾っても金属回収業者とは認められず、「ホームレス」なのです。

とにかく、家を失ってしまうと、「住所+氏名+身分証明書」という、この国の「人権保障対象国民キット」が無くなります。

そのため当然社会や国家から与えられると思い込んでいた年金、健康保険、生活保護、雇用保険など、あらゆるサービスを根こそぎ失ってしまうのです。

6. 資源物持去り禁止条例

2013年の春、福岡市が「資源物持去り防止に関する条例」を制定しようとしていました。

ホームレスたちは、アルミ缶回収でやっと生きているのに、この条例が出来て取り締まられるよう



条例制定に抗議して市役所へ（横断幕は別の物）

になれば、文字通り死活問題だと非常に切迫した様子でした。ホームレスを支援していた団体も「困ったことだが、どうしようもない。」と、手詰まりの様子であまり頼りになりそうもありませんでした。弁護士の友人がいたり市議会議員の後援会長をしていたので、日雇労働組合から何とか条例制定を止めてもらえないかと頼まれ、市役所や弁護士会、法務局の人権擁護部局などあちこちを回りました。

それに並行してホームレスの団体は市役所に対し、条例制定検討委員会で自分たちの意見を聴くようにとの要求書を何度も出しましたが、握りつぶされるだけでした。

そもそもこの条例制定検討委員会には、この条例で不利益を被るホームレスの声を代弁する者が入っておらず、委員構成からして不当なものでした。

市民からの苦情が、2009年の4件→2012年の191件へと年々増加していることを条例制定の理由にしていたが、その理由の筆頭に挙げられていたのは、「見知らぬ者がゴミ置き場において防犯上不安だ。気味が悪い。」と言うものでした。

福岡市民150万人のうち、年間わずかに191名が苦情の電話を入ただけでさっそく条例を作って対応するとは、役人をしていた私の感覚では、福岡市は異常に市民に親切だと感じました。

7つの区役所に苦情電話があったとすると、1つの区役所には2週間に1回の苦情電話がかかる計算になります。市民の苦情を言い訳にしていますが、市役所自身がホームレスを排除したかったのです。私が市役所の担当係長に、「この3年間でどの様な犯罪が起きているのか」と質問したところ、驚いたことに「犯罪の発生は把握していない。」との答えが返ってきました。

要するに、偏見を煽り不当にホームレスに対して「犯罪を起こしかねない人たち」と、怖がらせることを市役所自身がしていたのです。

役所にとって選挙権を持たないホームレスは「市民」にはカウントされていない印象でした。

ホームレスにとって、マンションのゴミ出し場は生活の糧を得る大切な場所ですから、その住民たちに嫌がられることが無いように気を付けています。ゴミ袋を開けてアルミ缶を取った後はきれいに後始末をするなど、みんな気を付けているのです。

「住所が無い＝投票権が無い」ホームレスたちは政治から見捨てられた存在なのです。それゆえ、役所がホームレスの死活にかかわる条例を作るのにホームレスの代表を委員に入れないのも、議会からの「お咎め無し」を見越してのことなのです。

共産党議員たちから推薦を頂き、この条例を担当する市議会の委員会で「不利益を被るホームレスたちの意見を聴かずに審議する条例制定手続は違憲だ。」と陳述させてもらいましたが、条例案は粛々と可決されてしまいました。昔は、役所は資源ごみを回収せずに埋め立てていましたが、その頃から貧しい人たちは資源となる金属類を拾い集め、金属回収業者に売って生活の足しにしていました。

つまり役所よりも前から、ホームレスたちは資源ごみで生計を立てる既得権者だったのです。

そのような事情を知らながら役所は政治的な発言力が無いのをいいことに、ホームレスの権利を尊重することなく条例制定を強行したのです。民法には誰でもが拾えるところに捨てられた不要物(この場合、アルミ缶)は持ち主の無い物なので、拾った者の所有物になると規定されています。それを民法(法律)より下位にある条例によって、ゴミとして出されたアルミ缶は役所に所有権があるなどとする主張は、法律は条令よりも優越するという法理論に反しており、間違っています。

7. 自立自立と言うけれど

福岡市では65歳以上のホームレスには借家を探し、生活保護を受けることが出来るようです。

これでホームレスを抜け出せて、めでたしめでたしと思いきや、意外とホームレス時代よりも生活がすさんでしまう人がいるそうです。孤独にむしばまれるのです。

今まではアルミ缶集めのために街中で寝起きする時、公園で昼飯を食べる時、アルミ缶をつぶす作業場、炊き出しの日、アルミ缶の買い取り業者の所でなど、しばしば仲間に出て話をする機会がありました。それがホームレス社会を出て、都心部から遠く離れた公営住宅に一人でいると、周りには誰も知り合いはおらず、やることもありません。お金はホームレスの頃よりもたくさんあって、つついとお酒に手が伸びます。そしていつしかアルコール依存症になってしまう人がいるのです。

最初の頃はホームレスになったショックで精神的にボロボロな日々だったのが落ち着いて来ると、先のことは考えるとややこしいのでヨコにおいて、しばらくは今のままでいいと思う人たちもたくさんいます。しかし一方でホームレス自立支援活動家の中には、そのような現実を認めず、自立自立と急き立てる人がいるのです。

ある自立支援活動家に条例制定の件で相談に行った時のことでした。私が「ホームレスの中には、今はこのままでいいと思っている人たちがいる。」と言った途端、急に声を荒げ、「根拠もなくいい加減なことを言うな！根拠を見せろ！」と人目も憚らず、すごい剣幕で怒り出しました。その活動家も委員になっている、国の「ホームレスに関する調査検討委員会」の報告書にも書いてあったことですが、聞く耳を持ち合わせてないようなので、反論しませんでした。

後から知り合いのホームレスに聞いたところ、自立支援に熱心に取り組むのはいいけれど、自立をせかされ、無理やり押し付けようとするところがあって敬遠する人もいるようでした。疲れ果てて先のことを考える元気がわかない時には、そっと見守っているのが一番だと思います。

ほとんどの国の給付制度は住所が無いと受けられませんが、その場合役所は、「博多区の福祉事務所のホームレス相談窓口に行って自立支援施設に住まわせてもらえれば、住所が出来て給付手続きが出来るようになります。」と言います。大抵のホームレスはそのことを知っていてその施設を使わないのです。あるホームレスの話だと、そこでは色々と管理されて「自立した人間としての尊厳」が認められない印象でした。

私はこの自立支援施設がホームレス問題について、逆に社会の免罪符のように使われている感じがしてなりません。その活動家のように、相手の気持ちも考えずに自立を迫るのは「ホームレスの尊厳」よりも「自分の活動の成果」を優先しているようで本末転倒のように思えます。

8. ひとりの死

2020年11月16日の早朝、ひとりの女性がバス停で倒れて亡くなっていました。近所に住む男が、「邪魔だったから、痛い目に合わせればいなくなるだろう。」と石を入れた袋で頭を殴って死なせてしまいました。男は色々と社会に馴染めず両親と生きていましたが、このあたりの清掃をボランティアでしていました。夜になるとやって来てバス停に座って寝る女性が目障りだったようです。

お金をあげるからいなくなってくれと頼んだこともあります。彼女はバス停に来るのをやめず、とうとう殴って脅すつもりが、死なせてしまいました。亡くなった当時64歳だったこの女性は、1年半くらい前から毎晩最終バスが出た後にこのバス停に来て座って寝ていたそうです。亡くなった時、お金は8円しか持たず、8か月前に使えなくなった携帯電話、それに着替えが入ったキャリーケースだけでした。たった20cmの奥行しかないベンチに毎晩座って寝ていました。

このバス停のベンチには、横になって寝させないためのひじ掛け型の区切りがついていました。ホームレスが横になって寝ないようにデザインされた「排除ベンチ」と言われるものです。寝心地は悪いけれど、幹線道路沿いで人目があるので襲われる心配が無いと思ってここで寝ていたのでしょう。

ホームレスになる前は、10年ほど首都圏各地のスーパーで試食販売の仕事をしていました。しかしコロナウィルスまん延で試食の仕事が激減し、家を失ってネットカフェに寝泊まりするようになり、最後はホームレスになってしまいました。地元広島の短大を卒業して地元の劇団でミュージカルや舞

台に出演しながら、結婚式場の司会をしていました。その後上京してコンピューター関係の仕事に従事し、それから試食販売の仕事をするようになりました。

高校時代の夏休みは友達と東京に出かけて、渋谷のファッションビルで買い物を楽しんだり、大人になってからはアメリカにいた伯父の所に滞在して過ごすなど、青春を満喫していました。とても「ホームレスになった人の人生」とは思えないのではないのでしょうか。

亡くなる2年くらい前までは試食販売の仕事をしていて、本人もまさか自分がホームレスになるとは思ってもみなかったことでしょう。これがホームレスの怖い所です。

家のある人がホームレスになるのはあっという間ですが、ホームレスが家の有る生活に戻るのは至難の業なのです。

そして、彼女を殺めてしまった男のように、家を失った人を汚いゴミか害虫のように嫌悪し、見えない所に追いやりようとする気持ちが社会の中に潜んでいると思います。

福岡市の公園にも「排除ベンチ」がたくさんあります。多分、普通のベンチよりも高価なのに、なぜこのベンチが増えているのでしょうか。

ホームレスが野垂れ死のうかがどうなろうが知ったことではなく、とにかく自分の目の前からは消えてくれとの気持ちがそうさせたのだと思います。

キタナイ奴だ、ウサン臭い、ジャマ、アッチへ消えろ、と言う偏見は、この男の人だけが持っていたのではなく、社会がみんなに刷り込んだ偏見と嫌悪感だと思います。

二人とも、この社会にはびこっている罪深い誤解と偏見の犠牲者のように私には思えます。

(この事件のことは、バス停 ホームレス 女性で、検索出来ます。)

おわりに

私は「自立支援」という言葉が大キライです。家を失ったホームレスたちに「住所が無いからできません。」と、そこから抜け出せなくしたのは社会です。自立しろとか、支援するぞとか偉そうに上から目線で言う前に憲法で保障されているはずの基本的な人権を、住む家が無いからと奪ってしまう社会のありようを猛省しろよと、強い憤りを感じています。

「生活困窮者自立支援法」などと命名する国会議員たちの人権感覚を疑いますし、この名称での法律制定自体、政治家を含む社会全体が、ホームレスたちのことを如何に理解していないかの証だと思います。「生活困窮者自立支援法」の名称そのものが、ホームレスたちの尊厳を傷つけています。

知人のホームレスは、「俺は、ホームレスはしていても、生活保護など受けて国の世話にはなったらん。」と言っていたのが印象的でした。(注 生活保護は国民の権利なので、受給していいのですが…)

自立支援などと言わずに、「尊厳回復保障法」にしていきたいと思います。

ホームレスたちは、家を失ったわけではありません。

社会の偏見と怠慢によって人権は蒸発し、「人間としての尊厳」を奪い取られているのです。

川瀬輝彦氏 略歴

昭和54年3月	九州大学法学部卒業
昭和54年6月	福岡県職員上級行政職採用
平成11年6月	福岡県職員退職
平成11年6月	有限会社カワセ取締役就任
平成15年7月	同社代表取締役就任
令和 3年6月	公益財団法人黒田奨学会監事 現在に至る

目 次

巻頭言 人権蒸発

— 存在を否定された国民／失意と尊厳 —

川瀬 輝彦

トピックス

黒田奨学会卒業生の金城翼氏が日本数学会賞を受賞！	1
九州大学博士課程・末田奨学生が優秀講演賞を受賞！	1
東京大学修士課程・松藤奨学生起業の会社が見事優勝！	1
九州大学修士課程・松井奨学生が学会でポスター賞を受賞！	2
井原元奨学生が卒業を前にして文科省公務員試験合格！	2
黒田奨学会卒業生の松下陸氏が検事に就任！	2

海外留学&研修報告

フィンランド留学を終えて

東京外国語大学国際社会学部南アジア地域専攻 4 年

藤井 かのん ... 3

黒田奨学会 OG からの海外便り

安東美咲氏	5
-------------	---

奨学生の近況報告	6
----------------	---

行事報告

令和4年度 前期第1回九州地区研修会	11
令和4年度 前期第2回九州地区研修会	13
令和4年度 関西地区研修会	15
令和4年度 後期第1回九州地区研修会	17
令和4年度 後期第2回九州地区研修会	19

公益財団法人黒田奨学会に対する寄付御礼 および 寄付継続のお願い 21

令和4年度奨学会基金への寄贈者	21
-----------------------	----

編集後記	22
------------	----

黒田奨学会研修会・発表抄録集	23
----------------------	----

トピックス

黒田奨学会卒業生の金城翼氏が日本数学会賞を受賞！

東京大学大学院数理科学研究科博士課程2年に在学中で、2015年～2019年に黒田奨学生であった金城翼氏がこの度、博士課程卒業と同時に日本数学会賞建部賢弘奨励賞を受賞されました。この賞は将来性ある30歳以下の数学者に贈られる賞であり、全国の若手数学者の中から選考された6名中の一人が金城氏です。研究内容は「コホモロジー的Donaldson-Thomas不変量の研究」というタイトルですが、これを見てすぐに理解できる人は少なさそうですね。

金城氏は本来ならば大学院修了は令和5年3月ですが、研究の学術的価値が認められた結果、その時期を待つことなく、1年半前の令和4年9月、博士過程の短縮ということで、今秋に博士号を取得して卒業されています。

まさに本人にとっても、我々黒田奨学会関係者にとっても二重の慶びであり、素晴らしい快挙！のニュースとなりました。改めて心から祝福させていただきます。

本人からは「この賞を頂けたのも黒田奨学会の皆様のご支援のお蔭です」という、嬉しいメールが送られてきました。この10月から半年ほど滞在研究員としてオックスフォード大学で研究を行うそうです。どこまで飛躍してくれるのでしょうか。‘ノーベル賞受賞！’という大いなる夢に向けて我々も応援しましょう。



「琉球新報」より

九州大学博士課程・末田奨学生が優秀講演賞を受賞！

九州大学工学府機械工学専攻・博士後期課程3年の末田奨学生が本年6月24日(金)～6月26日(月)に行われた第66回理論応用力学講演会において、タイトル「回転型振動子の自己同期現象に関するエネルギー的考察（印加電圧の影響）」の発表が優秀講演賞に選ばれました。この賞は36歳未満の若手発表者を対象として、講演会全体で15名程度に授与されるそうで、彼女の地道な研究が評価された結果といえそうです。

おめでとうございます！

彼女の受賞に際しての言葉です。

優秀講演賞を受賞できたのはひとえに黒田奨学会の皆様の温かいご支援のおかげです。この場をお借りして深くお礼申し上げます。優秀講演賞を機にさらに研究に励み、社会貢献できる研究者となれるよう頑張ります。



東京大学修士課程・松藤奨学生起業の会社が見事優勝！

東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻、修士課程2年の松藤奨学生が代表取締役として起業した株式会社Yanekaraが、2022年5月27日に東京都日本橋にて開催された三井不動産創立80周年記念事業「未来特区カンファレンス」の「生存特区」プロジェクトにて見事優勝しました。この「生存特区」プロジェクトは、「都市の自立性を高めるテクノロジー」をテーマに、スタートアップや企業の新規事業部門などに向けて、三井不動産グループと共創を目指す事業アイデアを競うものです。

優勝に際しての松藤奨学生の弁です。

「三井不動産は柏のまちづくりの中心的なメンバーです。東大の柏キャンパスで育ててきた私たちのシステムを実社会に展開するうえで重要なパートナーになってくれました。」

大学・大学院を通してやってきた研究の集大成が形になってくれた結果と言えそうです。



中央が松藤君

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000003.000067381.html> より

九州大学修士課程・松井奨学生在学会でポスター賞を受賞！

九州大学大学院生物資源学府生命機能科学専攻、修士課程1年の松井優樹奨学生在令和4年7月2日、北九州市九州国際会議場にて開催された第59回化学関連支部合同大会にて、「緑茶に含まれる成分Xの老齢マウスにおける認知機能改善効果」というタイトルでポスター発表を行い、優秀発表賞を受賞しました。専門家の方との質疑応答を通じて今後の研究について深く考えることもでき、今後も精一杯研究に励んでいきたいという松井奨学生の弁です。

井原元奨学生在卒業を前にして文科省公務員試験合格！

東京大学工学部航空宇宙工学科所属で現在は休学中ですが、研究室の手伝いという形で大学に通っている井原渉・元黒田奨学生在が、文部科学省の公務員試験に見事合格しました。旧科学技術庁に当たる部門で、国内の研究環境を整えるといった科学系の仕事に携わることになりそうだということです。自分の適性を考え、幅広く自分を生かせるのは文科省であり、模擬国連の勉強時に制度面の必要性を強く感じたと話しています。また、来年1月には大学に復帰して無事卒業ということですので、今後の活躍を期待しましょう。

黒田奨学会卒業生の松下陸氏が検事に就任！



2019年黒田奨学会卒業式
での写真より

2019年九州大学法学部を卒業した後、九州大学法科大学院での2年間の勉強後、2021年には司法試験を合格！という、順調に自己研鑽に努めてこられた松下陸氏がこの度、修習生として修習期間を終了され、検事に就任されることになりました。

松下氏は2017年の九州大学基幹教育賞受賞や1年飛び級による3年での卒業など、大学在学中は素晴らしい成績を残され、今回、見事に検事になられたわけです。長年の努力の成果ですね、おめでとうございます。

黒田奨学会事務所に挨拶のため訪れた彼の弁です。「社会正義実現のためにがんばります！」

フィンランド留学を終えて

東京外国語大学国際社会学部南アジア地域専攻 4年
藤井 かのん

私は黒田奨学会の皆様のご支援のもと、2021年8月から2022年6月までフィンランドのオウル大学に留学させていただきました。オウルはフィンランド北部最大の都市で、夏は白夜、冬は極夜が訪れ、最低気温が-20℃を下回ります。慣れない環境の中ではありますが、学びの多い大変充実した留学生活を送ることができました。

この留学で得たものは大きく分けて3つあります。一つ目は語学力です。フィンランドではフィンランド語が公用語ですが、若い層を中心に多くの人々が英語を話します。



オウル大学

私の受講した授業も全て英語で行われていました。最初は先生や周りの留学生の話す速度についていけず、その上自分の英語に自信が無かったため、ディスカッションの際に困ることが多々ありました。しかし、途中で「いくら拙くても伝わらないことはない」と気づき、そこからは気構えることなく意見を出せるようになりました。その結果、留学後受けた英語の試験ではCEFR C2レベルに到達することができました。

このように英語が通じ、フィンランド語を使う機会が少ないため、フィンランド語の習得は難しいだろうと考えていました。それでも、大学での授業やタンデム（言語交換学習）を通して学び、基本的なコミュニケーションは取れるレベルにまで上達しました。そして私の場合は、フィンランド語しか話せない子どもと関わる機会が多かったこともこの結果に貢献していると思います。住み込みのボランティアをしていた際には、子どもたちから実用的なフィンランド語を沢山学び、最後には英語より先にフィンランド語の単語が口を出るほどになりました。

留学で得たものの二つ目は、幼児教育・児童福祉についての知識です。これは留学のテーマであったため、最も力を注いで学びました。その中でもフィンランドならではの感じたのが、子育てをする親への支援が充実しているということです。私が実習をした保育園では、毎週水曜日に保護者が付き添い、子どもと一緒に時間を過ごしていました。この時間の目的は、親同士が繋がりを持つことだといいます。忙しく孤立しやすい時だからこそ、このような繋がり重要になります。また、ボランティア先のホストファミリーが利用していた「サポーティング・ファミリー」の取り組みも効果的だと感じました。これは、「ネウボラ」という子育て支援制度の一つで、家庭同士が協働して子育てを行うものです。親が忙しい時に子どもをパートナー家庭に預けることができます。十分な受け皿が無いといった問題もあるようですが、核家族化が進む日本では、このような支援を求めている家庭も多いのではないかと思います。

そして最後三つ目が、ジェンダーに対する考え方です。2021年のジェンダーギャップ指数ランキングで世界2位に位置し、男女平等で有名なフィンランドですが、私自身日常の様々な場面で日本との差を実感しました。例えば、家庭で女性が料理を担当することが私にとって当たり前でしたが、フィンランドでは男性も料理に参加します。お菓子づくりが好きな男性も多くいました。また父親の育児休暇が取りやすく、実際に私が実習をしていた保育園でも、平日の昼にも関わらず子どもと共に父親が

来ることがよくありました。

また、友人から「彼氏か彼女いる？」と聞かれた時はジェンダーの多様性を実感しました。その友人自身がバイセクシュアルであり、それを隠したりはしていませんでした。また大学構内でも手を繋いでいる同性カップルをよく目にしました。他にも、帰国前にヘルシンキを訪れた際はプライドウィーク期間中であったため、街中に虹色のプライドフラッグが溢れていました。私はフィンランドに来るまで、これだけLGBTQの人々が多いことに気づいていませんでした。これに気づけたことはもちろん、個々人の意識が変われば、これだけ世の中も変わるということを肌で感じたことは、間違いなく私の糧になったと思います。

留学期間中は、新型コロナウイルスの感染拡大やロシアのウクライナ侵攻など大きな問題も数多く起きましたが、その中で予定通り留学を終えられたのは多くの人の支えがあったからだと思っています。特に黒田奨学会からのご支援が無ければ、留学に挑戦すらもできませんでした。そして4年を超過する3ヶ月分も奨学金を支給していただき、大変感謝しております。また金銭面のみならず、研修会での先生方のお言葉や、岡本先生からのメールでのメッセージなどに精神的にも支えられていました。皆様のおかげで、寒くて暗い冬を乗り越えることができました。本当にありがとうございました。今回の経験を、今後の社会貢献に活かして行こうと思います。



保育園での実習中、福笑いに挑戦



友人達とオーロラ鑑賞



京都大学大学院人間環境学研究科 2012 年卒 安東 美咲 (旧姓・松村)

コロナ禍もだいぶ収束の兆しがあり、2022年の夏はおよそ2年半ぶりに日本に帰国しました。思えば真夏の日本に滞在するのは約10年ぶり、空港に着いたときに感じた蒸し暑さがとても懐かしく感じられました。奨学生の頃、夏休みの帰省中に奨学会でご指導を受けたことが思い出されましたが、奨学金だけでなく、学業・進路に関する相談をする機会も充実していた黒田奨学会には大変お世話になりました。

私は現在、経済学博士として、多国籍企業に対して国際税務のコンサルティングをする仕事をしています。特に、関連会社同士の国際取引の際に適正な価格付けがされているかという点については、常に各国の税務当局が注目するところですので、頑健な分析と詳細な文書化が求められます。具体的には、顧客である多国籍企業に対して聞き取りを行い、各国の関連会社がどのような活動を行っているのかを分析し、市場ベンチマークと比べて問題がないかを見ていきます。工場に赴いて製造や技術開発の過程を見せてもらったり、営業部門の責任者に顧客開拓の方法を聞いたりすることもあり、様々な業界のいろいろな一面を見られるので、常に新鮮な驚きや発見があるというのがこの仕事の魅力の一つです。

勤め先の事務所は、米国ワシントンD.C.近郊のマクリーンという町にあります。D.C.市内にある夫の職場とのちょうど中間くらいの場所に住み、電車で通勤しています。上の子はバスで小学校へ、下の子は夫とともに車で保育園に通い、子供たちが帰ってから仕事が終わるまでは、同居の義母が子供たちを見ていてくれるという日常です。

仕事と家庭の両立で悩む方々も多い昨今、家族をはじめ、いろいろな方々のご協力のおかげで今の生活が成り立っており、大変有難いことだなと思います。例えば、専門的な職種では、就職先が特定の地域や都市にしかないということが多々あり、それぞれがそのような事情を抱えた夫婦やカップルの就職問題を、しばしば二体問題と言います。特に大学教員の採用においては顕著な問題で、学术界を中心に問題になることが多い一方、夫婦セットでの採用など、様々な工夫がなされる場合もあります。私の場合、夫とは京都大学で出会いましたが、その後、米国コロンビア大学経済学部博士課程に進学する際、および、現在の職場に就職する際の2度の転居において、それぞれの関係者の柔軟な対応に助けられました。最初に思った解決策が諸々の事情でうまくいかなくても、いろいろな人に相談していくうちに、思わぬところで解決策が見つかることがあります。奨学生の皆様も、これからそのような問題に直面した時には、諦めずに希望をもってより良い解決策を探してほしいと思います。



レストランThe Lafayetteで
ご主人と食事中の安東氏

安東 美咲氏 略歴 (瑞藤会名簿より)

2010年：京都大学総合人間学部卒業

2012年：京都大学大学院人間環境学研究科修了

コロンビア大学経済学部博士課程修了

2022年現在：デトロイト、トウシュ・トーマツ勤務

専門：経済学博士 (経済理論、金融政策)

— 奨学生の近況報告 —

昨年度より会報奇数号では奨学生の近況報告の掲載を始めました。奨学生には毎月の奨学金振込の確認と併せて、ひと月分の近況報告をメールするよう依頼しております。最近特に1-2年生にみられることですが、勉学に関するだけでなく、日常生活の中で日々感じたこと、将来に関する、またいろんな場面で出会った際に感じる喜怒哀楽など、エッセイ風の描写を送ってくれる学生が増えました。

今号では特に夏休み中である8-9月の近況報告の中から印象的な報告を抜粋し、黒田奨学生が長い夏休みをどのように過ごしたのか、その一端を垣間見たいと思います。



● 関東地区 1年

夏休みに入り、上京後初めて福岡に帰省しましたが、やはり家族の温かみは尊いものでした。寮のご飯も美味しいですが、実家の味は何物にも代えられないです。夏休みは新しいことに挑戦しようと意気込みました。

8月下旬には富士山に登り、最悪の天候でしたが無事登頂成功しました。大変寒かったのですが、下山後の温泉は心身ともに癒されました。9月上旬には法律系と野球サークルの合宿に行ってみました。法律系の合宿は、山梨で5泊6日過ごし、前半に民法総則を丸々勉強し、後半はバナナボートや女装コンテストをして楽しみました。10月から役職が代替わりし、私は渉外責任者という合宿などの幹事を務める責任者となる予定です。中高に引き続き、大学でもリーダーとして活動して自分のスキルを磨いていきたいと考えています。

野球の合宿は、新潟で3泊4日過ごし、毎日練習や紅白戦をして汗を流しました。すっかり肌も焼け、久しぶりの運動で全身が筋肉痛になりました。秋学期は練習に行く頻度が減るのですが、適度に顔を出して健康維持に努めたいなと思います。

秋学期も近づいておりますので、履修登録をはじめ準備を抜かりなく進めていきます。

● 関東地区 1年

今月1日にて、期末試験が全行程終了しました。想定よりはるかに大変なもので、1日の勉強量に関しては過去に類を見ないものでした。やはり、単位が関わると、かなりの焦燥感に襲われました。残り一つレポートが残っていますので、励みます。

期末試験期間中に、息抜きでもと西新宿のSOMPO美術館に行き、ゴッホの「ひまわり」を見に行きました。他の展示に比べてかなり警備が厳重でした。近くで見ると絵の具の重なりが浮き出て見えて、かなりの重厚感。次は根津美術館、国立新美術館かなと考えています。

先日、新大久保にて友人とチーズタッカルビを食べに行ったのですが、なんと床からゴキブリと思われる虫が湧き出てきて（しかも3匹）。すっかり食欲が失せ店を後に。学びとしては、店探しはSNSだけに頼らないということですかね。

● 関東地区 1年

セメスター末の試験が終わって夏休みが始まり、簿記の勉強を再開しました。いったん3級の範囲を終わらせたので、休暇の終わる9月末までには2級の範囲を学習し終わる予定です。2か月も休みがありますから、簿記以外のことに関しても自分の知的好奇心に従っていろいろと手をのばしてみようと思います。第二外国語として選択しているフランス語と、小学生時代に少しだけ勉強した中国語はより深く学びたいと感じています。また、これまで時間のあるときにGoogle Colaboratory というサービスでごく簡単なPythonのプログラムを書いてみていたのですが、これももう少し高度なことをしてみたいと思います。幸い周りにPythonに詳しい友人が何人かいるので、彼らの助けも得ながらゆったりと学んでみたいのです。また先日、京都と大阪に行って高校時代の友人と再会し、中村佑介というイラストレーターの展覧会や下鴨神社の古本市に行くなどして楽しい時間を過ごしました。泊めてくれる友人がいるのはありがた

いことです。残りの夏休み期間には遠出する機会はありませんが、カフェに行ったり、おいしいご飯を食べたり、服を探したり、音楽を聴いたりして、自分なりに幸せに過ごす予定です。コロナは少し収まってきたようですが、それでも猛威を振るっているようですので、奨学会の皆様もぜひ健康にお気をつけてお過ごしください。私も体に気を付けて頑張ります。

● 関西地区 1年

春夏学期のテストも終わり、夏休みが始まりました。4月に大学に入学して、もう4ヶ月も経つのかと思うと、とても早く感じます。夏休みの間は、友達と遊んだり、サークルをしたりしながら、春夏学期の間にあまりできなかった英語の勉強をしたいなと思っています。大学の方でもTOLEFを受験する機会があるので、それに向けて準備をしようと思います。また、春夏の授業が終わった次の日に、兵庫の有馬温泉に行きました。高地だったので涼しかったです。温泉もとても気持ち良く、疲れをとることができました。帰りには、明石焼きを食べました。明石焼きは初めて食べましたが、たこ焼きのたこが入っていないものようでした。

夏休みは始まったばかりですが、これから有意義な夏を過ごしていきたいです。

● 関西地区 1年

期末テストも終わり、福岡に帰省してきました。先日の面談では対面でできるように準備していただき、ありがとうございました。お盆には久しぶりに家族揃って祖父母を訪ねることができました。先月の近況報告でも書いたように、最近、私は自身の先祖について興味を持っているので、祖父母に曾祖父母について色々と質問しました。その際、曾祖父が遺した海軍の帽子、鉢巻き、腹巻きや奉職履歴、そして1997年の86歳の時に書いた真珠湾攻撃についての直筆の手紙を見せてくれました。この手紙は現代では使われないような漢字や言い回しが使われており、現在解説を進めているところです。手紙の中には当時の心境も綴られており、曾祖父の思いを読み解くことに熱中しております。

戦争の悲惨さ、平和の尊さ、先祖への感謝の気持ちを深く考えるきっかけとなりました。自動車学校にも通いながら、長い夏休みを有意義

に過ごしたいです。

● 九州地区 1年

夏期休業中は、まだ不十分ではありますが、読書に主に取り組んでいます。また、先月より始めたアルバイトでは、業務とくずし字の解説に少しずつ慣れ、先生や先輩の話を伺う充実した時間となっております。

今月は、小学生の頃から参加させていただいていた地元の歴史文化勉強会に久しぶりに参加しました。加えて13日には、恩師からお誘いをいただき、母校の中学校で3年生に向けて、私の進路について話す機会をいただきました。「受験するにあたり大事なことは何か」、「モチベーションを保つにはどうすればよいか」など、今の私にも難しい質問ばかりで、自らの学業も内省しなければと感じさせられました。人に伝える言葉をもつことが今後の大きな目標になりました。

● 九州地区 1年

今回は、十五夜の夜に高校の同級生と教養について議論したことについて話したいと思います。議論に参加したメンバーは、東大生三人、東京理科大生一人、九大生二人、東大を退学してアメリカに留学中一人です。議題は二つあり、一つ目が、教養を得ることによって、その人の人生はより良いものになるのか。二つ目は、教養を得ることは、社会全体にとっていいものなのかです。

長時間の議論になったので結論だけ話すと、「わからない」です。この議論の難しかった点は、そもそも教養の定義が難しいということで、実態がわからないものの議論をすると、いざ定義に戻って考えようというときに、足場がなくなってしまうため、議論が進みませんでした。

このような議論はとても楽しいので、今後も定期的に行っていきたいです。ちなみにその日は素麺と豆腐で作った月見団子を食べながら、月のライブ映像を見ました。

● 九州地区 2年

近況といたしましては、学校支援活動という実習の一環で佐賀市内の中学校に行き、体育祭の準備の手伝いをしてきました。コロナの影響と台風の接近により、先生方の手伝いとしてテ

ント張りを行うのがメインで、ほとんど生徒と関わることがないまま活動を終えました。暑い中、重いテントを運び、設営して疲れたというのが率直な感想ですが、教師の裏の仕事を経験することができたことで、教師という仕事について考えるときに、教えること以外の面からも見ていけないといけないと感じる機会になりました。

また、活動終了後の空き時間に、鍋島中の先生から授業で使えるような、古銭を使った小ネタを教えてくださいました。マジックや古銭に関する豆知識だったのですが、思わず引き込まれる内容で、教科書の知識だけではなく、生徒が興味を持ってしまうような面白いことに関する知識を持ち、話術にも長けた先生が「面白い先生」「いい先生」と呼ばれるのだろうと実感しました。教科書の知識や教養以外にも、たくさんの方のことを身に付けていく努力をしようと思われた、貴重な機会にもなりました。

● 関東地区 3年

先週、最後の課題が終わり、夏休みに入りました。データ分析の授業は、まず最初に数学の理論を学んで、その後演習でコンピュータに実装するというもので、最終課題は生のデータを自ら探し出し、分析するというものでした。実際のデータは授業用のデータのように整備されたものではなく、中々思い通りの結果が得られませんでした。現場での試行錯誤を実感でき、面白かったです。3Qからは教養卒論という、文系的な卒論(卒論とは別)が始まるので、夏休みからより計画的に物事を進める習慣を心がけます。

また、最終課題前に筋トレをしていた時、高校時代に患っていた椎間板ヘルニアが再発して、ベットで横になったまま最終課題をこなす日々が続きました。ヘルニアは今後も付き合っていかなければならず、安静にすることで痛みが引く病气(酷い場合は手術すると治るが、自分はそこまで酷くないです)で、高校の時にリハビリも経験しているので、大事ではなかったですが、今もコルセットを巻いて治るのを日々待っています。徐々によくなっています！夏休みもなるべく規則正しい生活を送ります。

● 関東地区 3年

先週、2週間続いた試験期間が終わり、夏季休暇を迎えました。第2タームの試験では、これ

までほとんど学んだことのなかった経済学、生物学の試験があったのですが、思い通りに解くことができませんでした。これからさらに専門的な分野に進んでいきますが、専門の知識だけを増やしていても、それがどのように社会貢献にいきるのか、などがわからなくなる恐れがあります。

そのため、専門の分野でなくても興味を持って調査し、自ら学んでいくことが大切であると学びました。この二つの分野を授業として学ぶことはこのタームで終わりますが、将来、広い視野でどのように技術を活かしていくのかを考える際の材料になると考えるので、これからも自分なりに調べていこうと思います。

生活面では、9月の中旬から所属している野球部の秋リーグが始まります。これまで試験、課題などであまりいくことができなかったため、この夏季休暇を活用して野球に没頭しようと考えています。

● 関東地区 4年

お盆になりましたがまだまだ暑さは続き、各地で猛暑が続いているようです。毎日、蝉の鳴き声と太陽光線を浴びて夏を感じながら、自転車を漕ぎ、学校に行っています。研究室は10時からですが、最近は暑さを避けるため、朝7時頃に学校に登校しています。早朝の研究室はとても静かで作業や勉強がはかどります。

現在は実験結果の再現性を取るため、同じ実験を何度も繰り返しおこなっています。そのためには細胞の培養が前提となり、さらに条件設定がとても繊細なため、なかなか思うようには進みません。先日は、朝一番に実験に取り掛かろうとして登校したところ、育てていた細胞が全滅していてがっかりしたこともありました。生物系の分野の実験とはこのようなものだと自分に言い聞かせながらコツコツと行うようにしています。現在では様々な企業がコロナワクチンを出していますが、ここにたどり着くまでの開発はどんなに大変なことなんだろうかと思います。



● 関東地区3年

夏休みの海外旅行を通して自分を見つめ直したい、という短編的近況報告です。

前置き

令和4年8/19から9/16までフィリピンに滞在していました。

目的は旅行と、英語のみで生活することで英会話力の向上ができないかと期待したこと、そして、私にとってはフィリピン在住の私の親戚に初めて会うこと、そして母の墓参りでした。

友達と二人で行き、セブ、マクタン、プエルトリンセサ、カシアン島、タイタイ、マニラを周り、セブとマクタン島以外では私のフィリピンの親戚の家を訪問し泊まってきました。そして、私はこの滞在中を通して、大きな感動を受け、これからの人生についてある決意をしました。

フィリピン滞在全体の感想

まず、総評として今回の滞在中は大成功だったと思います。旅行という面ではフィリピンの色々な地域に滞在をし、美しい海を泳いだり、歴史的な建造物を訪れたり、田舎から都会まで練り歩いたり、ツーリングしたり、フィリピン特有のトライシクルやバン、ジプニー、バス、モーターサイクルといった移動手段も経験しつつ、色々な街並みを見、宿泊もホテルから民家までと、フィリピンのあらゆる部分を体験できたと思います。

英会話力の向上については、全てのことが表現できるようになったわけではないですが、日本で友達と英会話を練習していた時より、日常的に使うことによっていろいろなフレーズが定着し、1カ月の滞在中としては満足できる程度まで向上できたと思います。

親戚に会う目的も、フィリピン人である母の3人の兄弟、それぞれにいる4人ほどの子供、そしてたくさんの叔父、叔母、いここに会ってきました。フィリピンの人は、とてもおおらかで温かく、ホスピタリティにあふれ、親戚に会うのは初めてでしたが、すぐに仲良くなり、これからは気兼ねなく話せる関係になりました。

特に、フィリピンに住む兄以外には兄弟がいないし、日本人のいともいないため、一人っ子のように過ごしてきましたが、フィリピンの兄やいとこと出会い仲良くなって、初めて同世

代の親戚でもあり、良い友達ができたと感じました。

母の墓参りも達成し、初めて母と向き合うことができ、見守ってくれてありがとうと言ってきました（母は私が生まれた日に他界しました）。

感動

私はフィリピンの人間関係の価値観に大きく感動しました。日本はフィリピンと違ってサービスがすべてに行き届いており、道路がきちんと舗装されており、町並みもきれいで貧しくもなく、技術力も給与水準も高いですが、人間関係においては、フィリピンのそれに比べると冷たく、出る杭は打たれ、個性を出しづらい、など改めて感じました。そして、フィリピンのそれは私が以前から聞いていた欧米のそれと似ているものがあることに気づいたときに思いました。私は海外の方が向いているのではないかと。

また、フィリピンからみれば日本の給与水準が高いように、日本からみれば給与水準が高い国も存在します。海外で就職すれば、日本より好条件で高い給与をもらうことも出来るように思います。もっとも、日本での就職や社会生活も実際に経験してから判断したいので、海外就職や外資系企業への就職はそのあとになり、とりあえずは、それら選択時に必要となる英会話をこれから本気で学ぼうと思いました。結論です。

考えの変化

英会話を本気で学ぼうと思った時、私の中でいくつかの考えが変わりました。私はここ1年程、悩み、迷い、ずっともがいていました。目標を見失っていたからです。AIの勉強や起業等いくつかのことに目を向け、実際にやってみましたが、そのどれもが私にはしっくりきませんでした。その理由は高校の時の自分と今の自分を比較していたからでした。詳細は省きますが、高校の時、私は水中ドローンを作ることを目標にしていました。最初の段階ではそれを作る技術力も知識もなかったのですが、文化祭に向け2年かけて水中ドローンを作っていく過程は私に多くの学びと成長感をもたらしてくれ、非常に満足のいくものでした。しかし、大学に入ってから私の追いかける目標はなぜか、高校の時に感じたこの成長感を感じさせるものではありません。

ませんでした。

今回、英会話という目標にたどり着いたとき、ふと、今までの自分を一旦捨ててしまえばいいのではないかと思いました。今回のフィリピン旅行も恐らく、もともと海外に興味がなかった自分を覆したからだと気づくことが出来たように思います。

考えてみれば、いくつかの目標がしっくり来ていないと感じていたのは、目標そのものが大きな成長を感じさせるものではないといけなと焦っていたからであり、AIの勉強のように目標とするものの視野が狭くなっていたのは、自分の得意な分野ばかり見ていたために目標とする視野が狭くなっていたのかもしれない。

そう考えれば、今までの自分を捨てることもでき、おろそかにしていた自分の苦手な分野の目標も受け入れられるようになりました。また、プライドを捨て、謙虚になり、自分自身をもう一度ゼロから再構築しようとも思いました。

決意

言うなれば第2の自分を作る、それがこれから数年の私の決意です。そこでは、英会話と量子情報工学の勉強、それから訳あって伏せますが、いくつかの目標を軸として自分を作っていきます。ちなみに英語は来年に受験する院試にも必要であり、量子情報工学の勉強はここから3年間の研究室生活には欠かせません。ですが、AIの勉強はバイトでやっているの、その範囲を超える勉強はしないことにしました。

社会貢献について

フィリピンは国全体として貧しいということもあり、貧富の差がかなりあるようで、今回の旅行ではそれを目のあたりにしてきました。

自分のうちは、フィリピンではエリート層に属するようなので、この国の平均的な暮らしを直に見たわけではありませんが、町並みや清掃員が時給100円程で働いているというのを見聞きし、この国の貧困を改善するためにはどうすればいいかと度々考えてきました。

ネットで検索すると、フィリピンの貧困は農地の開放がまず急がれると書かれています。それがなぜ今まで行われていないか、単に今までの政治家が悪かったのか、それとも農地の開放によって問題が生じるのか、そこまでは分かり

ませんが、とりあえず目の前の貧困を支援する団体に寄付するとか、政治家を育成するとか、自分なりに色々考えました。しかし、結論はまだ出ていません。フィリピンに限らず、世界の貧困を改善する方法について、今後知識を深めていけたら、と思います。

ちなみに個人的に驚きだったのが、ジプニーや路上で物乞いをする子供や大人がいて、私自身は、そういう人は本当に貧しいからやっているのであり、かわいそうだからお金をあげたいと思う派ですが、フィリピン人である兄は「子供にはあげないが、障害者にはあげる」という考えで、その理由は、子供の頃からこのようなお金の稼ぎ方を知ってしまうと、大人になっても同じやり方しかできず、職に就けないからということでした。

お金がなければ学習する余裕もないし、それどころか、毎日食べものが手に入るかどうかも分からないような暮らしの中、少しでも楽にしてやれば、食べ物を探すなど以外の時間を作ることができる、と思っていた私には、現地の人のこの考えは意外であり、新たな視点でした。どちらが正しいかは私には分かりませんでした、それについても今後考えていけたらなと思っています。



行 事 報 告

● 令和4年度 前期第1回九州地区研修会 令和4年6月4日

令和4年度の第1回九州地区研修会を6月4日、土曜日にオンラインにて行いました。発表会に先立って、午前9時半より、午前中9名、午後8名の奨学生を対象に面談を行いました。学部新入生は一人20分、大学院新入生および学部生2年以上の奨学生には一人15分の時間枠としましたが、近況報告だけでなく、就活や大学院進学などの進路についての相談も多く、充実した面談を行うことが出来ました。

午後3時過ぎからは発表に移りましたが、大学院生からスタートして学部2年生まで7名の発表が行われ、内容的には宇宙ブラックホール、位置情報解析システム、マネキンの役割、スパッタリング（薄膜技術の一つ）、心不全パンデミックや延命といった医療問題に加え、生体内酵素機能など基礎医学的な発表もあり、いつもながらの黒田奨学会研修発表会を特徴づける、幅広いテーマでの会でした。

特に「マネキンの役割」の発表には日頃馴染みがないテーマだけに活発な質問が参加者から出され、研修会の盛り上がりを感じさせてくれました。

最後は恒例により小田部理事による講評ですが、褒めながらも注意すべき点などの評価があり、学生たちには非常に有意義であったでしょう。18時前には無事に終了しました。

参加役員：伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、小田部理事（教育指導担当）、八並理事（教育指導担当）および野中理事（関東関西地区担当）

奨学生参加者

九州地区：当日面談者および発表者、九州地区新入生全員

関西地区：堺、東（開）、郭

関東地区：東（遼）、方倉、広田

（岡本）

研修会に参加しての感想

九州大学工学部電気情報工学科2年
工藤 雅人

令和4年度1回目となった今回の研修会・発表会ではブラックホールやマネキン、延命治療など多岐にわたる分野での発表を聞かせていただき、非常に分かりやすく興味深い内容に、各分野に知識の浅い私でもなるほどな！と何度も思われました。また、昨年度に自身でも発表を一度させていただいたため、発表のテクニックやスライドの工夫についても一歩前に出た目線で見ることができたかなと思います。今回は研修会の中で特に印象に残った発表として、古賀さんの「ブラックホールの音色が教えてくれること」と福井さんの「酵素」ってすごい！について感想を書かせていただきます。

まず古賀さんの発表では、導入として近年のブラックホール関連の情報の紹介から始まり、私自身もブラックホールの撮影が成功したというネ

ット記事を以前見たことがあったので、そこで一気に内容への関心が高まりました。そこからブラックホールの準固有振動とは何なのか、どのような特徴があるのか、そして最後に準固有振動を研究する（音色に耳を澄ます）ことでブラックホールの量子的状態まで考察できる、という結論に導く過程が、図を用いて視覚的に分かりやすく説明されており、その分結論の興味深さがより強くなりました。このような難解な分野を一般の聞き手にも理解できるように説明するというのは、プレゼンの上で非常に重要だと感じる発表でした。またスライドについても、背景色を白ではなくあえて淡いベージュを使うことで、オンライン発表特有の画面のまぶしさを軽減したり、グラフ・図を際立たせたりと、いろいろな効果を持たせているところが参考になるなと思いました。

福井さんの発表は第一に図がほとんど手描きであることに驚かされました。自分でイラストや図を描くからこそ、既製のものよりも自分の伝え

たいことを正確に伝えられるのだなと発表を聞きながら実感しました。また、図を用いたスライドでは文量を少なめにして口語で図について補足の説明を入れ、文がメインのスライドでは内容をかいつまんでまとめた内容を発表しているところも、発表を明快にする要因の一つなのかなと思ひ、自分の発表でも取り入れてみたいなと思ひました。最後に実際の血液検査結果を参照するというのが今までの発表内容の振り返りの役割と実際の活用例の役割を担っており、聞き手を引き付ける舞台装置としてとても効果的でいいな！と思ひました。

今回挙げさせていただいたお二方以外も、難しい内容を図やイラストを使って分かりやすくしたり、質問を予測して準備をしておいたり今後の発表に解いて参考にしたい工夫が盛りだくさんの素晴らしい発表でした。改めまして発表された奨学生の皆さん、本当にお疲れさまでした！

九州大学医学部保健看護科2年 新井 花奈

今回、第1回九州地区奨学生研修会に参加させていただいて、また、自分自身も発表させていただいて、良いところも課題点もたくさん見つけることが出来たと思う。

良かったことの中で、特に印象的だったのが、九州大学工学府土木工学専攻、修士1年の小山田莉緒さんの発表「GISを使って何ができる？」である。まず、小山田さんはGISとは何かという部分の説明で、具体例として全国の新型コロナウイルス感染者数を表示したマップを出して説明していた。とてもわかりやすいだけでなく、最近誰もが見たことのある例を使うことで、聞く人の興味をうまく引き出していた。また、研究の内容の部分では、図や資料を使ってとてもわかりやすいスライドを作られていて、口頭での説明とスライドで無駄のない説明をされていた。小山田さんの説明を聞いていて、私自身、情報がスラスラと頭に入ってくる感覚だったので、とても聞きやすく

理解しやすかった。聞く人にストレスなく聞いてもらえるようにすることが、発表において重要なのだとわかった。そして、一番素晴らしいと思ったのが、発表用のスライドの他に質問用のスライドを作られていて、質問時間に上手にそのスライドを使っていたことである。質問用にスライドを作っていることだけでも素晴らしいと思うが、何より1人目の質問者の段階でそのスライドを上手に活用されていたということは、小山田さんの予測能力の高さの表れではないかと思う。こういう質問が来るかもしれない、予想されていたのかどうかはわからないが、未来を無意識的にも推測したのは確だろう。一見したら「偶然ではないか」と思う人もいるかもしれないが、私は人のニーズに応えられる能力だと思う。小山田さんの発表で、研究発表での「聴き手のニーズを満たす」ことの大切さを学んだ。

私自身の発表に関しては、本当はもっと話したいことがあったが、時間内に収めるためにかなり内容を削った、というのが第一の感想である。必要最低限の盛り込みたい内容を入れたつもりだったが、かなり早口で話したので、自分が予想していたほど伝わっていない気がした。振り返ってみれば、話したい内容がたくさんあるがゆえに私自身、頭の中を整理できていなかったのかもしれないと思う。研究発表は「聴き手に伝わること」がそもそも大事な部分だと思うので、短い時間でいかに相手に伝えるかをこれから意識していきたい。

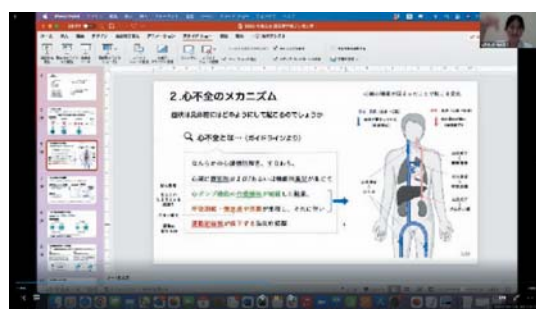
最期に、研修会の準備をしてくださった黒田奨学会の先生方と、研究発表や質問をしてくださった奨学生の方々、研修会をありがとうございました。



小山田学生発表スライドより



参加者ギャラリービュー



松崎学生発表質疑応答

● 令和4年度 前期第2回九州地区研修会 令和4年7月16日

令和4年度の第2回九州地区研修会を7月16日、土曜日にオンラインにて行いました。発表会に先立って、午前10時より、午前中8名、午後8名の奨学生を対象に面談を行いました。今回の面談時間は、学部新入生は2回目とあって一人15分とし、対象奨学生全員を一人15分の時間枠としましたが、この時間枠で足りないほどの多彩な内容の報告をしてくれる学生もいました。全体としての印象はそれほど緊張もしないでぎっくばらんな感じで報告してくれ、私としては身内からの相談のような雰囲気の中に終わった感じがしております

午後3時過ぎからは発表に移りましたが、大学院博士課程生からスタートして学部2年生まで6名の発表が行われ、内容的にはいつもながらの黒田奨学会研修発表会を特徴づける、幅広いテーマでの会でしたが、自分の専門科目にこだわらずに興味を持って調べた内容の発表があったことが今回の特徴でしょうか。

最後は小田部理事の途中退出のため、恒例の講評はありませんでしたが、代わりに3名の教育指導担当者より簡単な感想を述べてもらい、17時半には無事に終了しました。

参加役員：伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、小田部理事（教育指導担当）、八並理事（教育指導担当）および野中理事（関東関西地区担当）

奨学生参加者

九州地区：当日面談者および発表者、九州地区新入生全員

関東地区：広田

（岡本）

研修会に参加しての感想

九州大学工学府応用化学専攻 修士1年
高岡 祐太

九州地区第2回研修会発表会の1週間ほど前に、私は発熱、咽頭炎、強い倦怠感の症状が出ました。幸いにも、コロナウイルスは陰性、ただの風邪でした。しかしながら、発熱を伴う風邪は久しぶりでした。強い倦怠感の中、1人の部屋は孤独を感じ、収まらない症状にも不安が募りました。熱は3日ほどで収まったのですが、倦怠感がなかなか取れません。病気の時にあまりしてはいけないことは、症状をGoogle検索して自分で勝手に不安になることですが、長く続く倦怠感の中で募る不安に負けました。Googleで、倦怠感が症状として現れる病を調べてみると、検索の一番上に糖尿病という単語が出てきました。倦怠感以外にどのような症状があるのかを調べてみると、目がかすむという症状が現れることが分かりました。実際に窓の外を見てみると確かに風景がかすんで見えるのです。これは糖尿病かもしれないと思いながら、メガネを取るとレンズが汚れているだけでした。この出来事を、石崎さんの「糖尿病」についての発表を聞いているときに思い出しました。

九州地区第2回研修会発表会は、この出来事を思い出したに加えて、二つのことを知る機会になりました。

一つめは分野を知らない人にどのように自分の研究テーマを伝えるのかということです。人に自身の研究を理解してもらうためには、研究を背景からわかり易く説明する必要があります。また、うまく説明するためには自身も深い理解が必要になります。このことを理解した上で、準備および発表を行うことが重要であると知りました。

二つめは自分が扱っている分野とは異なる分野に触れることの重要性です。異なる分野に触れることで知見が深まり、ものの事の見方、捉え方が変わってくるのだと思いました。九州地区第2回研修会発表会では、機械系、糖尿病、数学、宗風、税と、私自身の分野とは異なる内容が多くありました。中でも印象に残っているのは、高瀬さんの「宗風」についての発表でした。工業高等専門学校をバックグラウンドに持つ私にとって、文系の内容を深く掘り下げた経験はあまりありませんでした。故に、「宗風」については今回の研修会で初めて触れる内容でした。次にお寺などに行き仏像を見た際には、宗風が頭をよぎることは間違いないでしょう。

私は九州地区第2回研修会発表会を通して、研究を知らない人への伝え方、さまざまな機械、数学、仏教、税の分野に触れることができ、説明力、自身知見が深まったと感じています。九州地区第2回研修会発表会は、大変良い経験になりました。

研修会に参加しての感想

佐賀大学医学部2年
福井 優子

今回は私にとって6回目の研修会への参加となりましたが、毎回奨学生の方の発表には様々な刺激を受けるばかりです。ひとつひとつの発表が印象的で大変勉強になるものでしたので、この場をお借りしておひとりずつに感想を述べさせていただきたいと思います。

まず、九州大学の末田先輩による自己同期現象についてのプレゼンテーションですが、工学系の知識がない私にとって、はじめは少し難しく感じられました。しかし、振動搬送機といった応用例も紹介して下さったため、その点では身近に感じることができました。

九州大学の石崎先輩は、糖尿病とインスリンについて発表して下さいました。今回紹介された内容は、インスリンの歴史など私が知らないことばかりだったため、医学部の後輩として自分ももっと勉強する必要があると感じました。

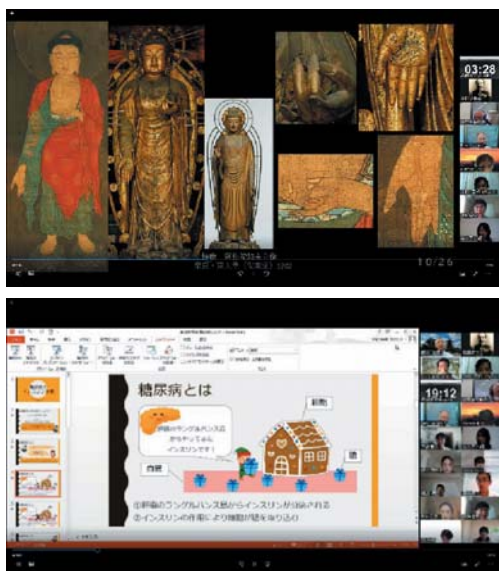
九州大学の高岡先輩の発表では、化学系の研究がどのように行われているのかがよくわかりました。研究の内容自体は少し難しい部分もありましたが、先輩が試行錯誤を重ねながら苦勞して研究されているということが、ひしひしと伝わってきました。

九州大学の高瀬先輩は、宋風という概念について、豊富な画像を用いて説明して下さいました。私は宋風という言葉は初めて耳にしましたが、仏像には少し興味があるため、学問的なお話を伺うことができて面白かったです。

九州大学の矢ヶ部先輩は、ピローケースについて数式を用いて考察していく過程を、わかりやすく発表して下さいました。私が質問をした際には、スライドにその場で書き込んで答えて下さったため、非常に理解しやすかったです。

最後に、佐賀大学の川邊さんは、私自身もいま気になっている、日本の財政について教えて下さいました。日本が抱えている借金のしくみなどを明瞭に説明して下さいだったので、ここで得た知識をもとに、私もこれからの日本の状況について考えていきたいと思いました。

研修会を経て私が改めて感じたことは、見る人を惹きつけるプレゼンテーションができるようになりたいということです。私はパワーポイントの使い方が決して上手ではありません。もちろん本来は研究する題材や手法こそが重要なことではありますが、それをどう伝えるのかということが、現在の私にとっては最大の課題だと考えています。そのため、自分自身が感動した、先輩方や同級生のパワーポイント資料を研究し、来年の発表にぜひ活かしていきたいです。また、先日の第一回研修会で発表した際、私は事前に用意していた発表に精一杯で、せっかくなされた質問に対して満足な回答をお返しすることができませんでした。今後はそちらについても予め対策しておき、万全の体制で発表に臨みたいです。



参加者ギャラリービュー

左上：高瀬学生発表スライドより
左下：石崎学生発表スライドより

● 令和4年度 関西地区研修会 令和4年9月3日

令和4年度の関西地区研修会を9月3日、土曜日にオンラインにて行いました。今回こそは対面式と意気込んでいたのですが、7月に入ってから急激なコロナ感染者拡大のために、泣く泣く、オンライン式発表会にせざるを得ませんでした。

研修会で行う発表会前の面談に関しては、夏休みを利用して8月中に全員の面談を済ませており、当日は発表会のみということで、12時20分より行いました。

大学院生1名からスタートして学部2-4年生まで7名（内1名欠席）、1年生4名、計11名の発表が行われましたが、研修会で1年生が発表するのは今回の関西地区での発表が最初ということになります。

内容的にはいつもながらの黒田奨学会研修発表会を特徴づける、文系理系を含めた幅広いテーマでの発表となりましたので、巻末の抄録集に是非目を通してその特徴を感じて欲しいものです。

まずトップバッターの発表ではいきなりオペラのアリアが朗々と流れ、いつもは土曜朝という、休日に慣れた脳が覚醒されて仕事モードになり、驚きよりも感動さえ覚えた印象的なスタートで始まりました。さらにまた、今回特に印象付けられたのは新入生の発表で、テーマの選び方、発表の仕方は1年とは思えないものがあり、内容も分かりやすく簡潔よくまとめられていました。ただ表に出ないところで、例えば発表前提出の抄録文字数が200字という制限をかなりオーバーしたものが多くみられ、修正に手間取ったこと、発表当日は発表時間10分の制限を超えての発表が多かったことなど、約束が守られていなかったのは少々残念なところでした。

また、今回もオンライン発表会でしたが、学生による質問が少なめだったようです。自分の専門分野とは違うこともあるかもしれませんが、だからこそ、素直に疑問を感じたら勇気を出して発言して欲しいものです。

最後は恒例の小田部理事による講評ですが、褒めながらも注意すべき点などの評価がされ、学生たちには非常に有意義であったことでしょう。来年はより一層の向上を期待したいものです。

ということで、無事に17時には終了しました。お疲れさまでした。

参加役員：伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、小田部理事（教育指導担当）、八並理事（教育指導担当） および野中理事（関東関西地区担当）

奨学生参加者

関西地区：当日発表者全員

関東地区：山中

（岡本）

研修会に参加しての感想

京都大学工学部建築科3年
徳村 夏輝

私は9月4日に関西地区研修会・発表会に参加いたしました。まずは私の発表についての感想を述べたいと思います。

今回で私は、通算3回目の発表でしたが、やはり緊張してしまいました。私は前期で履修した建築学科の専門科目『都市設計学』で学んだことを基礎として、安全な都市設計には何が必要かについての発表を行いました。火災によって町の崩壊を経験したスイスのベルンという都市と、スマトラ地震や津波によって甚大な被害を受けたインドネシアのアチェという都市を例に挙げ、現代都市の安全設計にはハード面からの対策（耐火性の高

い建材の利用、耐震構造、水利システム、復興シンボル）と、ソフト面からの対策（消防団の設立、災害文化の伝承、参加型住宅再建、ファシリテーターの導入）の二つが必要だという考察を述べました。私の中で授業中に学んだことから推察をまとめ、頭を整理することができて、今回の発表は非常に有意義なものであったと感じています。

しかし、反省するべき点も多々あります。まず、事例に偏りがあった点です。海外の災害事例のみを取り上げ、日本の身近な事例に触れなかったのは、例の挙げ方として不適切でした。次に、考察が不十分であった点です。せっかく二つ事例を取り上げ、安全な都市設計に必要な要素を抽出したにもかかわらず、その過去の事例が現在の都市設計に与えた影響や、実際に日本で起きた近年の災害で参

加型住宅再建などが活用されたかどうか、などを取り上げませんでした。さらに今後の展望も述べるべきだったと思っています。今回の発表での自らの拙さを克服し、次回の研修会やその他就職活動でよい結果を残すことに尽力をしたいと思います。

次に他の黒田奨学生の発表を聴いての感想を述べたいと思います。毎年上回生の発表には感嘆させられてきましたが、今年もやはり圧倒的でした。小河さんの、オペラは音楽と台本から成るが、時には台本がオペラを上回り得るという発表はとても新鮮で心が沸きました。また、原さんの発表は個人的に学習している分野のものであるため、去年の内容も記憶していたのですが、今年も身近な話題で分析を行われていて非常に分かりやすく感じました。さらに同回生や一回生の発表も面白かったです。なかでも私は宮崎さんの体内時計とその活用についての発表は、自らの体に関する事なので特に心に残っています。

このように今回の研修会は、普段かかわりあうことのない分野を専攻されている方の発表を聴くことによって自らの知見をさらに深めることができ、さらに発表を通して私自身も自らの考察を深めることのできた、非常に意義深いものでした。今後も反省や知見を活かして精進したいと思います。

神戸大学経営学部2年 今井 琴海

今回の関西地区研修会は私にとって2回目のものでした。昨年と同じZOOM形式で、2年生以上の奨学生は去年の研修会で一度発表を聞いているので、昨年と比べて安心した気持ちで臨むことができました。とはいえ自分の学んだことをスライドにまとめて、多くの人に向けて発表することには昨年同様緊張してしまい、落ち着いて発表することができませんでした。

自身の反省点は多くありますが、発表内容への理解が浅かったという点が一番の反省点です。発表後の質疑応答で指摘されたことに満足に答

えることができず、自身の認識の甘さを痛感しました。発表の内容自体も、講義で学んだことからさらに発展させるということができておらず、ただ方法をまとめただけの面白みのない発表になってしまったと感じました。

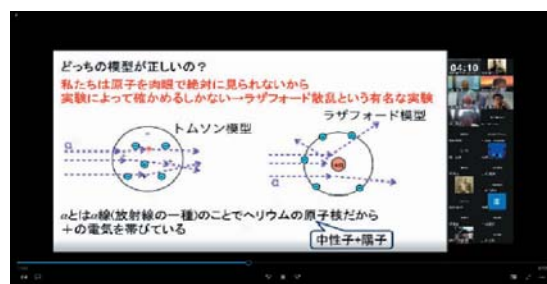
発表内容の反省としては特に、野中理事に指摘された要求収益率についての説明が十分でなかったという点があります。関西地区の奨学生で経済学の分野で学んでいるのは原先輩しかいらっしやらず、他の方々は私の発表分野についてあまり知らないだろうという意識が足りず、わかりやすく発表をまとめるということができていませんでした。スライドの作り方もわかりやすいとは言い難いもので、岡本先生に指摘されたように、レーザーポインターを用いるなどの工夫もなかったのも、発表を聞いてくださる方々への配慮が足りないものであったと思います。また、話すスピードも、練習段階では10分をオーバーし、発表の短縮も検討するほどでしたが、いざ発表を終えると1分以上時間が余ってしまい、自分はとても早口で発表をしてしまったのだと気づきました。

他の方々の発表はやはり素晴らしいものばかりで、同期の宮崎さんや先輩方はもちろん、今年から入った3人の1年生の発表も、分かりやすく親しみやすい内容で感服しました。スライドの作り方も文字で埋めるということはず、文字はキーワードや短い文章だけで、あとは写真を載せて、足りないところは言葉で補うということが、わかりやすい発表には必須なのだと改めて感じました。また、動画を使った発表は、わかりやすさに加えてこちら側の心を引くもので、動きのないものに比べるとより興味が掻き立てるものでした。

来年は、ゼミが始まるので去年・今年よりもさらに専門的な発表ができるようになるかと思いますが、今回、他の方の発表から学んだことや、小田部先生の講評から学んだことを踏まえて、わかりやすい発表ができるように頑張ります。



小河学生発表スライドより



山田学生発表スライドより



堺学生発表スライドより



東学生発表スライドより

● 令和4年度 後期第1回九州地区研修会 令和4年10月8日

令和4年度の後期第1回九州地区研修会を10月8日、土曜日にオンラインにて行いました。発表会に先立って、午前9時半より、午前中9名、午後8名の奨学生を対象に面談を行いました。今回の面談時間は、学部新入生が一人20分、2年生以上は15分の時間枠で行いましたが、前期の成績報告を提出した後であり、話題としてはGPAの成績や夏休みの活動が中心となり、また3年生や4年生ではインターンシップや就活、大学院入試結果など、盛りだくさんの話題となりましたが、スムーズな流れで順調に面談を終えることが出来ました。

午後3時20分からは発表に移りましたが、大学院修士課程生が1名、学部4年生が1名、3年生1名、2年生1名、1年生2名と、6名の発表が行われました。発表を行う学生には発表会に先立って200字程度の抄録を提出してもらうことにしています。提出期限に遅れての提出も今まで結構見られていたのですが、今回は皆さん、締切前に提出してくれましたが、伝えたいことを200字以内で纏めることに慣れていないのか、修正には頭を悩まします。いつも講評してくれる小田部理事も言われていましたが、タイトルにも伝えたいことが分かるように、そして抄録も分野が違う視聴者にも分かるよう、略語を使うことなく、簡潔に書いて欲しいものです。

内容的にはいつもながらの黒田奨学会研修発表会を特徴づける、幅広いテーマで構成された会でした。最後は小田部理事の恒例の講評後、17時半には無事に終了しました。

参加役員：伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、小田部理事（教育指導担当）、八並理事（教育指導担当）および野中理事（関東関西地区担当）

奨学生参加者

九州地区：当日面談者および発表者、九州地区新入生全員

関東地区：広田、朽網

（岡本）

研修会に参加しての感想

佐賀大学教育学部2年
川邊 遊

教育学部の学校教育課程で学び、専門的な実験や研究にまだ縁の無い私にとって、この黒田奨学会の研修会は、研究発表を通して普段知ることのない物事の詳しい仕組みについて知り、驚きを感じることができる貴重な場です。特に理系分野は、難しく感じることも多いですが、発表にあった研究が生活のどのような場面で役に立っているのかということが分かったときに、技術やメカニズムを研究するということの重要性を実感します。

今回の研修会で特に印象に残った首藤さん、難

波さんの発表について感想を記したいと思います。まず、首藤さんの地域経済循環についての発表は講評でもお話があったように、初めてその内容に触れる私にとっても分かりやすい説明とスライドでした。補足資料も用いて、自分の研究分野を、全く知識がない人に理解してもらうことができようになっており、研究自体の興味深さはもちろんのこと、発表全体から学びを得ることができました。

そして難波さんの発表ですが、「徒然草」にある兼好法師の考え方を通して、医師として「人生」を考察すべきとし、徒然草の内容をかみ砕きながら自らの考えを語る姿は、発表スタイルとして新鮮

に感じました。また、難波さんの考えを聞きながら、自分でも改めて生命倫理などについて考えると共に、自身に今一番必要なのは、素直に生き、完璧や不変などに執着しない「無常」を悟ることだと思わされました。さらに、発表内容から岡本先生が「年を取ると何事にも感動を覚えなくなる」と言っていたのが非常に印象に残っていて、私はまだ若いので、今のうちに様々な体験をして感動するという経験を、たくさんできるように行動していくべきだと感じました。

この奨学会の研修では、多様な分野の研究発表から普段聞くことのできない話を聞くことができ、とても興味深く感じます。しかし科学や工学などの分野で特に専門的な話になると途中から内容についていけなくなり、質疑応答で先生方と話されていることも分かりませんでした。しかし、今回は感想を書くという役割を与えられたことから、発表の内容が私にとっても分かりやすいものだったのかは分かりませんが、理解できないところがありながらも、自分の持つ小さな知識や身近なところに結びつけて物事を考えられたことによって、終始関心をもって発表を聞くことができたと感じています。今後もこの意識をもって積極的に発表を聞いていこうと思います。

最後になりますが、新型コロナウイルスの感染拡大も落ち着いてきていますが、今回の研修もオンライン形式で実施されました。私は黒田奨学会に入ってから一度も対面形式の活動に参加したことなく、他の奨学生と直接お会いしたこともありません。それでも研修会で研究発表を聞く中で、奨学生の方々の日々の活動を垣間見られるような気がしていて、私自身も黒田奨学会の奨学生として頑張っていかなければと刺激を得る良い機会となっています。今後の研修会も楽しみにしつつ、他の奨学生の方々のステップアップに負けないように、私自身も精進していこうと思います。

九州大学生物資源環境学府
生命機能科学専攻 修士1年
松井 優樹

今年度奨学生として採用された私にとって3回目となる九州地区研修会は、普段触れることのない分野についての新たな知見を広めていただき、とても刺激を受ける機会になりました。大学でのゼミや友人との交流では、同じような研究をしているメンバーがほとんどであるので、同じ分野についての理解を深めることはできても、専門分野

以外についての研究について触れることができません。そんな中の研修会では、文系、理系の縛りにもとらわれず、専門的で最先端の知見を得ることができ、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。

発表は、生体メカニズム、工学系、文学系、社会系と幅広い分野の構成でした。私は、生体メカニズムについて研究をおこなっているため、生体メカニズムについての発表では、私の研究と違ったメカニズムについて研究をおこなっており、とても興味深かったです。特に、私は普段用いていない機械やサンプルを用いて研究を行っており、さらに詳しく教えていただきたいと感じました。

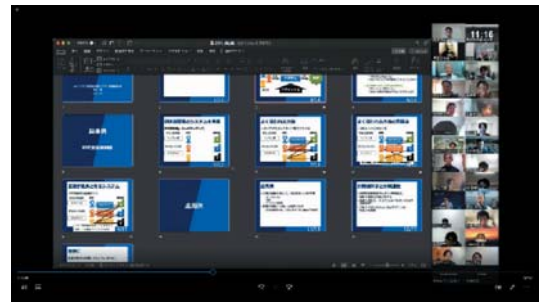
他の分野は、普段全く触れる機会のない発表でしたが、背景から具体的に発表していただき、理解を深めることができたと思います。特に、難波さんの「徒然なるままに、人生を考察すれば」の発表では、古典文学の1フレーズから人生のあり方を具体的に説明していただき、普段読まない古典文学の中に隠された人生の教訓を得ることができ、ことに奥深さを感じました。

さらに、私は、黒田奨学会の研修会の発表は、発表技術が高いなと感じています。専門的知識を有しない人に発表する際は、専門用語を使わないこと、背景などからわかりやすく説明することは当たり前かもしれませんが、その中でもスライドでは模式図を用いたり、補足資料を配布したりなど、わかりやすく伝える工夫が感じられ、理解も深まったと思います。また、質問のレベルも高いなと感じています。昨年までコロナ禍によるリモート授業が行われていましたが、オンラインではなかなか質問をすることが勇気のいることだと思います。しかし、研修会では、制限時間の10分では足りないほど質問が飛び交い、とても良いディスカッションができていると思います。普段専門としていない人からの質問は、新たな発見や基礎的な内容でも理解が追いついていないところが明確になるので、より研究が発展するのではないかと感じます。

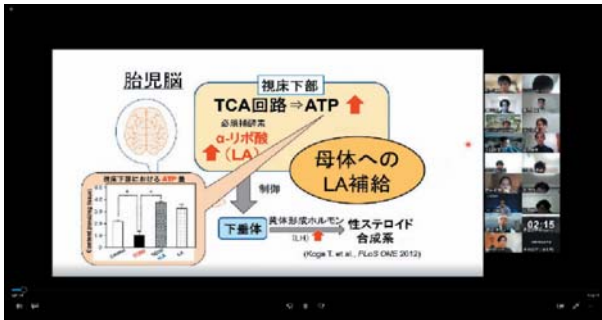
私の発表は次回なので、今回発表された方に負けないような発表ができるようしっかり準備に努めていきたいと思っています。発表者の方は、普段の研究と並行しながら、発表のためにスライドの作成や発表の練習などに時間をかけられたことを感じました。発表者の皆様、本当にお疲れ様でした！



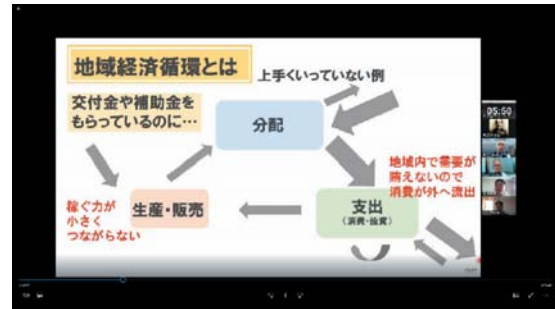
参加者ギャラリービュー



横山学生発表質疑応答



藤本学生発表スライドより



首藤学生発表スライドより

● 令和4年度 後期第2回九州地区研修会 令和4年11月12日

令和4年度九州地区研修会の最後となる後期第2回九州地区研修会を11月12日、土曜日にオンラインにて行いました。これまでの九州地区研修会と同様に発表会に先立って個人面談を行いましたが、学生の都合により、今回の最後の研修会に変更せざるを得なかった学生もいるため、総勢22名という大勢の面談者数になってしまいました。午前9時15分より、午前中10名、午後8名の奨学生を対象に15時まで面談時間となりました。

4年生以上ではほとんどの学生が就職や大学院入学が内定している関係で、話題としては専らそのことに集中したようです。下級生の学生では大学での受講状況やサークル活動が話題の中心となり、また、1年生は10月にも面談を行った関係か、状況としては特段変わったことはなく、皆さん、元気に大学生活を過ごしているという感じでした。

午後3時から発表に移りましたが、大学院修士課程生1名、学部4年生3名、2年生1名、1年生2名に加え、健康上の理由から関西地区研修会で発表できなかった1年1名と、計8名の発表が行われました。

学生の皆さんは発表の回を重ねることにプレゼンテーションでのpower point作成や発表技術に目覚ましいほどの進歩がみられているようです。ただ今回の発表では10分の発表時間を充分に使っていないのがかなりあったことや、加えて、調査内容やスライド作成における焦点がぼやけている発表もみられ、残念なことでした。次回の発表に期待したいものです。

参加役員：伊達理事長、田中事務局長、岡本常任理事（教育指導担当）、渡邊理事（教育指導担当）、八並理事（教育指導担当）および野中理事（関東関西地区担当）

奨学生参加者

九州地区：当日面談者および発表者、九州地区新入生全員

（岡本）

研修会に参加しての感想

九州大学薬学府創薬科学専攻 修士1年
藤本 菜奈

九州地区今年度最後の研修会ということで、いつもより多くの方からたくさんのお話を聞くことができました。ありがとうございます。

私が今回最も印象に残ったのは、松井さんの緑茶の成分であるカテキンで認知症を防ぐというものです。研究テーマが脳のことで、自分と一部関連していたと言うことはもちろんですが、修士課程の研究内容を噛み砕いてわかりやすく伝えられていると感じたからです。私は前回発表を担当していましたが、表現や詳細など全く違うバックグラウンドを持つ方にどのように伝えればいいのか、とても悩んでいましたので、図や発表の流れ、説明の仕方等吸収するところが多くありました。

他にも、地震や空腹状態の攻撃性、離島医療、プログラミング等、普段、自分が詳しく知らないけれど興味のあるものを説明していただけることは、本当にためになります。ここでは、その中でも特に印象に残っている2つをお書きします。

1つ目は、林さんの離島医療についてです。実際に離島で研修している経験はとても羨ましく、自分もやってみたいと思いました。ドクターの精神状態についても考慮しなければいけないことや病院と介護施設の境が曖昧になるようなお話を聞いて、高齢者の方や医者の方のお話を両方聞けるカウンセラーの派遣も一緒にしたら、ドクターの仕事が減ったり、皆の健康に繋がったりするのかなと感じました。離党といっても全く他人ごとではなく、日本全体がこのような状況に確実に近づいていっていることを気付かされるテーマでした。

2つ目は、高山さんの地震波と断層の研究です。かなり専門的で私には難易度が高かったのですが、興味深かったです。地震の波の進み方は一回地中に潜って地表に出てくる全反射を利用したものだとして聞いて、真っ直ぐではないことを初めて知りました。また、本筋とは逸れますが、昔に習った全反射は、勝手に光のイメージだったので、音も光も全て波であることを思い出されました。

他にも発表方法や、スライドのデザイン、表現方法など、皆様随所に工夫があり、とても楽しく拝聴するとともに、毎度たくさんの学びがあります。ZOOMでもたくさん質問をさせていただいていますが、対面だったらもっと議論が進むだろうと思ひ、いつか皆様とお会いできることが楽しみです。

熊本大学工学部材料応用化学科3年
檜木野 介子

先日行われた九州地区後期第2回の発表会に参加させていただきました。私は、前回の研修会で発表させていただきました。高専時代の卒業論文発表の反省を踏まえてスライドの確認、発表時間10分を目処に発表練習などを行っていましたが、本番はとても緊張し、練習通りうまく発表することができなかったことを覚えています。今回発表した学生の方達も、そのような緊張感の中で発表したのだと思いますが、これまでであった3回の研修会の注意点や、指摘があった点をスライドに反映させて、見やすいスライドを作ったことを窺うことができ、発表のレベルも高く、研修会に向けて練習と改善を繰り返してきたのだなとわかる、素晴らしい発表でした。

黒田奨学会の研修会では、研究の分野の多面性を感じました。これまでも、学会での発表や高専時代の卒業論文発表など発表会は数回行ってきましたが、そのどれもが自分と同じ分野、あるいは関連性のある分野でした。しかし、この研修会では、自分の分野である工学だけでなく、医学、薬学、法学、歴史や文学など様々な分野で、それぞれが自分の研究内容や興味のあることについてまとめて発表していました。このような幅広い分野の研究を知ることができる研修会は自分の中で斬新的で、楽しく発表を聞くことができました。今回の研修会の中で最も印象に残っているのは、田之上さんの「腹を空かせた魚は戦いに弱い？強い？」という発表です。田之上さんの発表では、空腹状態の魚は餌を食べている魚に比べて勝率が高いこと、空腹状態の魚同士を戦わせると、戦いの持続時間が長くなることなどが結果として挙げられていました。また、その原因として、興奮性の神経伝達物質であるグルタミン酸の分泌が多くなり、興奮が亢進されることが挙げられていました。自分はこの発表を聞くまで、餌を食べていない魚と餌を食べている魚が戦った時には、単純に体力などの問題から餌を食べている方が強いと思っていました。また、この結果の原因を調べるために、勝者と敗者の神経経路を調べるという方法は工学系に携わっている私には考えることもできませんでした。

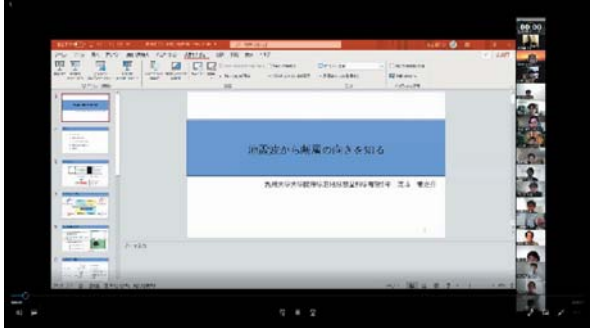
研修会で自分とは違う分野の発表を聞くことでこれまで学んだことのなかった分野に興味を持ち、自分で調べる機会が増えました。分野にとらわれず様々な事柄に興味を持ち調べることは、知識を増やし、視野を広げます。そうすることで、

結果的に自分の分野である工学系の研究を行う際に行き詰まった時や、原因を探る時に多角的にアプローチができるようになって考えています。そのため、視野を広げることができ、他分野へ触れる機会を与えてくれるこの研修会は非常に有意義な時間であると考えています。

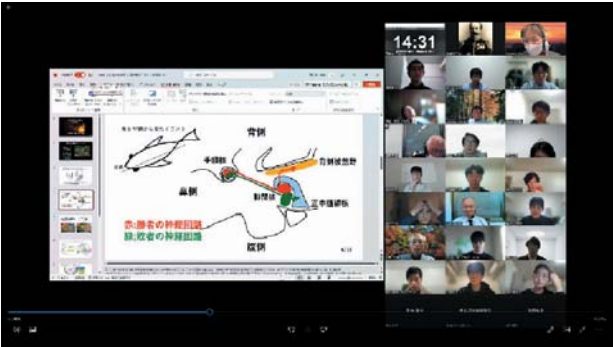
自分は高専から熊本大学に3年次編入という形で編入し、熊本大学での研究は、来年からですが、研究する時には、黒田奨学会で培った広い視野や多面的に物事を捉えることを解析や考察に活かして研究したいと思います。



参加者ギャラリービュー



高山学生発表スライドより



田之上学生発表スライドより



工藤学生発表スライドより

公益財団法人黒田奨学会に対する寄付御礼 および 寄付継続のお願い

従来より黒田奨学会からお願いしています御寄付ですが、お陰様で令和4年度前期、10月31日現在で36万6千円となっております。

瑞藤会会員の皆様、および当奨学会の理念にご賛同・ご支援を頂いている皆様には改めてお礼申し上げます。と同時に今後も引き続き、当奨学会への御協力を心からお願いする次第です。

よろしくお願いいたします。

公益財団法人・黒田奨学会理事長
伊達 健太郎

令和4年度奨学会基金への寄贈者（敬称略、順不同）

令和4年4月1日～令和4年10月31日 （ ）は黒田奨学生OB、OGの卒業年

今藤恵子	藤野龍一	竹下政雄
今藤久夫	武石重裕 (S48)	山下謙 (H19)
秋根卓美	土屋雅彦 (S53)	三角啓介 (H28)
白水秀俊	石津宗久 (H1)	井ノ口功基
竹中駿介	矢次正彦 (S43)	井ノ口正浩
木村菊子	瀬口友樹 (H29)	
伴 曜 价	花田 允 (H31)	
山田公彌	東寺裕康 (S61)	
吉田隆治	井原恒治	その他 匿名希望 7名

編集後記

今号の巻頭言は黒田奨学会の監事を昨年から務められている川瀬氏が担当してくれました。日頃あまり考えていないホームレス社会について、現状や実態を紹介され、そして行政へのするどい批判もこめられているようです。この機会に、人権とは？、改めて考えたいものです。

元奨学生・金城翼氏の日本数学会賞受賞という素晴らしい快挙をお知らせしましたが、もしかしたらノーベル賞受賞者が黒田奨学会から出るかも？　なんてスタッフ一同、大いに期待を膨らませています。正夢になって欲しいものです。

続いて、黒田奨学会卒業生からも嬉しいお便りが届きました。米国ワシントンD.C.近郊にお住まいで経済学博士として国際税務のコンサルティング会社に勤務されている安東様、ご活躍ぶりを垣間見ることができ、嬉しい限りです。奨学生達も金城氏や安東氏など素晴らしい先輩達が世界で頑張られていることを知り、大いに刺激を受けたのではないのでしょうか。安東様、ありがとうございました。

コロナ禍が治まらない中、今年も研修会はすべてオンラインになってしまいました。奨学生と対面で会うこともなく、奨学生が楽しみにしていた研修会後の懇親会（我々もです）も開けないまま、3年間で過ぎてしまいました。特に奨学生は‘個人面談の場’で我々と個人的に話すことはあっても、学生同士がお互いに顔を突き合わせて話すことが全くないために情報交換はゼロ、交流がほとんどないために、どんな生活をしているのか、どんな考えを持っているのか、など全く知らないようです。ということで、毎月送られてくる近況報告より抜粋したものを掲載しましたが、「隣の人は何する人ぞ」、いかがでしたでしょうか。

6月発行の会報92号と一緒に送付しました「瑞藤会会員名簿」には、令和4年6月30日現在で600名以上の会員名が記載されていますが、どのような近況を過ごされているのか、ほとんど情報がありません。瑞藤会会報は会員同士のコミュニケーションを図る場でもあります。是非、近況報告、後輩へのメッセージなど一言二言三言、お寄せ戴きますようお願いいたします。

ついでながらですが、三千円の御寄付の方も再度お願いいたします。

2022年、令和4年もコロナ、コロナと言っている内に終わりに近づいてきました。コロナ禍の中の生活、もう3年経っています。昨年発行の会報91号の編集後記には令和3年11月9日現在での福岡市感染者はゼロと書いており、コロナ収束への期待感？をもっていました。しかしながら、令和4年11月9日現在では福岡市感染者は936人で、このところの感染者数をみると、第8波の兆し濃厚となっています。もう、コロナ収束はあり得ないのでしょうか。ウイズ・コロナを続けていくしかないのでしょうか。

コロナのことを考えると悲観的になってしまいますが、2023年を迎えるにあたって、飛躍できるきっかけを探したいものです。私事ながら、年明けると早々に満77歳の喜寿（本来なら数え歳77歳を言うようですが）を迎えます。加齢による生理機能減退と闘いながらも黒田奨学会運営に頑張りたいものです。

皆様のご健康とご活躍を祈りながら編集後記を終わらせて頂きます。

令和4年11月下旬
編集責任者 岡本順子（常任理事）

黒田奨学会研修会・発表抄録集

九州地区前期第1回研修会 令和4年6月4日

1. ブラックホールの奏でる音色が教えてくれること

九州大学理学府物理学専攻・博士3年
古賀 一成

ブラックホールはその存在が理論的に予言され、重力波の観測やシャドウの撮影などにより、直接その存在を確認することができている。このブラックホールが生み出す重力波は固有の振動をすることが知られており、太鼓を叩いたときにある振動数の音が聞こえるように、「音色」を奏でているように見なすことができる。今回はこのブラックホールの音色に耳を澄ますことでわかることについて、私の最近の研究を交えながら紹介していこうと思う。

2. GISを使って何ができる？

九州大学大学院工学府土木工学専攻・修士1年
小山田 莉緒

GIS (Geographic Information System) は、位置情報を含むデータをマップ内に表示したり、解析したりすることができるシステムで、都市計画や交通、ビジネスの場でよく用いられる便利なツールである。私の卒業研究では、GISを用いて地震時の道路閉塞状況を再現し、最短経路を検索した。今回はまず、GISとは何か、できることや活用例などの基本的なことを説明した上で、身近に感じる事例3つを発表する。

3. マネキンの役割の変化

九州大学文学部美学美術史研究室4年
小倉 菜穂

今回の研修会では、服飾業界におけるマネキンの役割の変化について発表いたします。具体的な内容としては、前回発表した日本の洋装マネキンの歴史を確認しつつ、その背景にどのような人々の生活があったのか、価値観の変化があったのかについて追究したものとなっています。とりたてて注目を浴びる存在でないものが何故時代によって激しく変化するのか。人々の無意識のまなざしによって形成されたマネキンの姿について考察します。

4. 「心不全パンデミック」とはなにか、なぜ取り組むべきか

九州大学医学部4年
松崎 広太

みなさんは心不全という病気にどのようなイメージを持たれているでしょうか。実は心不全患者数とがん患者数は同程度ですが、これはあまり知られていない事実です。近年、高齢化等が原因で心不全患者が急増しており、この状態は感染者の急増になぞらえて「心不全パンデミック」と呼ばれています。今回はみなさんに、心不全の病態やそれらを取り巻く課題、そして今後どの部分に焦点を当てていくべきかについてお話できればと思っています。

5. スパッタリングについて

九州大学工学部電気情報工学科4年
山田 健太

私はまだ卒業研究に着手できていないため、研究室のゼミで学んだスパッタリングについて発表します。スパッタリングとは材料の表面加工技術の一種で、真空容器内に加工したい材料と成膜材料を対峙させ、アルゴンガスを注入した後に放電を起こすと、イオン化されたアルゴンが成膜材料に衝突して粒子を弾き出し、その粒子が加工したい材料に付着するという技術です。なかなかイメージしづらい現象ですが、できるだけわかりやすく説明できるよう努めます。

6. 自然な死か延命か ― ジレンマ解決への一歩 ―

九州大学医学部保健看護学科2年
新井 花奈

終末期医療について調べていたところ、ある記事が目にとまった。医療技術が発達した現代では、ひと昔前までは看取られていた患者さんも、治療で命を保持することが出来るようになった。それは輝かしい面がある一方で、病院・患者・家族の間で新たなジレンマを引き起こしている。一見どうしようもない問題に見えるが、医療状況や日本国民の考え方の調査によって解決への一歩が見え、難しいことではない。「意思を表示する」ということだ。

7. 「酵素」ってすごい！

佐賀大学医学部2年
福井 優子

「酵素」と聞いて、みなさんは何を思い浮かべるでしょうか。中には、酵素を使用している健康食品をイメージする人もいるかもしれません。確かに酵素は私たちの健康に深く関わっていますが、その働きは健康食品では補うことができないほどに莫大であり、生きていくために無くてはならないものです。今回は「酵素を利用して病気の診断をする」ことに焦点を当て、医学の領域において「酵素」とは一体どのようなものなのか、簡潔に紹介したいと思います。

九州地区前期第2回研修会 令和4年7月16日

1. 自己同期現象のエネルギー的考察

九州大学大学院工学府機械工学専攻・博士後期課程3年
末田 美和

自己同期現象とは、2つ以上の異なるリズムを持つ物体を何らかの方法で結合させると同じリズムに引き込まれる現象で、特別な制御なしに同じリズムに揃えられることから様々な振動機械に応用されています。しかしながら、自己同期現象

の発生メカニズムは十分に解明されておらず、振動機械の効率的な設計法が確立されていないのが現状です。今回は自己同期現象をエネルギー的観点から考察し、所望の同期状態にできる設計値を見積もる方法を提案します。

2. 糖尿病とインスリン治療

九州大学医学部6年
石崎 菜々子

糖尿病という病気を皆さんも何度か耳にしたことがあるのではないかと。一般的に、糖尿病は生活習慣病の一つとしてよく知られており、その治療法の一つとしてインスリン治療がある。インスリンが発見されてから100年が経過し、今年にはインスリンを用いた治療の開始から100年という節目の年となることから、このような機会に、糖尿病とインスリン治療に関して皆さんの理解をより深めてもらいたいと思い、今回の発表テーマとした。

3. Bi/Uio-66を前駆体とした電極触媒を用いたCO²電解還元によるギ酸合成

九州大学工学部応用化学科・修士1年
高岡 祐太

カーボンニュートラルの観点からCO²電解還元(CO²RR)が注目されている。CO²RRの合成物であるギ酸はエネルギー貯蔵性に優れた化合物であり、その合成にはBiなどの触媒が検討されてきたが、性能は十分な水準ではない。本研究では、化学還元によって得られたBi/Uio-66を強塩基処理して電極触媒とすれば高いCO²RR活性が得られ、その活性向上には、Bi/Uio-66由来のZrと炭酸イオンの相互作用が寄与していると考えられる。

4. 3つの宋風

九州大学文学部人文学科4年
高瀬 佳奈

日本彫刻史界には「宋風」という言葉がある。これは平安時代末期以降に造られ、その図像・様式・技法に宋・元の影響がみられる仏像を指す。しかし、中国文化の受容の程度は、時期や地域によって様々であり、先行研究によれば「3つの宋風」として分類されている。具体的な作例を観察することで、各々の宋風において誰が中国の文化をもたらし、どのような態度でそれらが模倣されたのかを明らかにしたい。

5. ピローボックス容積最大化問題

九州大学理学部数学科4年
矢ヶ部 稜

ピローボックス型とは、身近なもので言うとマクドナルドのアップルパイが入っている箱のようなカタチで、箱を作る際に体積が最も大きくなるカタチです。応用例として、レターパックは折り方を指定していないため、ピローボックス型で折ると、理論上最も大きな体積のものを入れることができます。今回は、同じピローボックスでもどのように作ると最も体積が最大になるのか。私の研究での結果について発表します。

6. 「将来、日本の財政は大丈夫？」

佐賀大学教育学部2年
川邊 遊

日本経済について考える機会が増える中、先行き不透明な状況に不安を感じていたため、これら疑問や不安を解消することを目的に、まず、現在の財政状況を理解した後、財政課題である「国債」を中心に調査した結果について考察を加えて発表します。日本は経済大国である一方、社会保障費増大による多額の累積国債残高を抱える借金大国でもあります。今回の発表が現在や将来の日本財政について考える機会となり、また関心を高める機会となれば幸いです。

令和4年度 関西地区研修会 令和4年9月3日

1. イタリアオペラにおける「台本」－入門編－

京都大学大学院文学研究科文献文化学専攻イタリア語学イタリア文学専修修士1回生
小河 義典

従来のオペラ研究は音楽や作曲家に関するものが多く、台本・台本作家についての研究は盛んではありませんでした。しかしながら、オペラは音楽と台本という2つの要素から主に構成されるものであり、台本は音楽と同程度、時としてそれ以上にオペラ作品の中で重要な位置を占めています。本発表は「入門編」と称して、オペラ台本の構造や面白さを私の研究成果を例に挙げつつ、皆さまにご紹介いたします。

2. テレビ登場と動画配信サービス登場による映画産業への影響の比較

京都大学経済学部4年
原 知輝

3年のゼミにおける特定の企業・業界に対する自由研究の中で、それぞれの興味・関心に基づき、動画配信サービスの登場による映画産業への影響について研究を行った。歴史的な観点から、似た事例としてテレビ登場による映画産業への影響を取り上げ、比較しながら分析した結果、テレビ登場時の方がはるかに映画の興行収入が減少していることがわかった。考察として、娯楽の種類や配給会社の対応という二つの要因が関係していると思われる。

3. 三重県北部の一地域における地質構造の解析と日本海拡大期との関係

京都大学理学部3年
権藤 満人

【目的】フィールドワークで調査した地域の地質構造がどのようなプロセスを経てできたのかを調べる。【方法】調査で集めた地層や断層の姿勢データをもとに地質図学による解析および地質図を作成する。【結果】調査範囲中では北端と南端に花崗岩層が東西に走っており、それに挟まれて砂岩や泥岩などの堆積層の積み重なりが見られた。【考察】地層の傾斜から、約二千年前の日本海拡大期に伴う『半地溝』の形成による構造であると推測される。

4. 生物多様性に対する経済的な価値評価

神戸大学国際人間科学部3年
高田 早紀

これまでの日本における経済社会では、生物多様性や生態系サービスの多くをタダ同然に扱ってその価値を十分に認識してこなかったことから、それらの劣化を招くような意思決定が多くなされてきた。生物多様性や生態系サービスの価値を適切に認識するためには、経済的な価値に置き換えることにより可視化することが有効な手段の一つであると思われる。本発表では、生物多様性を経済的に評価する手法について紹介し、その問題点について考察する。

5. 都市の安全設計

京都大学工学部建築科3年
徳村 夏輝

われわれが住む日本は、火事や地震、津波、噴火といった自然災害がとて多く発生する災害大国である。このような日本において、安全な都市の設計を行うことやその仕組みを理解することは重要である。今回は、日本や世界の様々な都市において実際に発生した災害や災害発生後の取り組みを事例から紹介し、安全な都市についての考察を行う。結論として、安全な都市に必要な対策は耐震といったハード面の対策とそれ以外のソフト面の対策である。

6. ラザフォード散乱実験で原子構造の手掛かりを得よう

大阪大学理学部3年
山田 和輝

原子の構造がまだ明らかなでない20世紀初頭において、ラザフォード散乱実験は原子構造を解明するのに大きな進歩をもたらしたといえる。ラザフォード散乱実験とはヘリウムの原子核を金原子に当てることで、静電気力によってヘリウム原子核の軌道がどのように曲げられるかを測定する実験である。今回は、私が実際の装置を用いて実施したラザフォード散乱実験の結果とそれに対する考察から、原子がどのような構造をしているのかを紹介する。

7. 投資プロジェクトの実施を決定する方法について

神戸大学経営学部経営学科2年
今井 琴海

前期に受けた講義の中で興味深かったものについて発表する。企業がとある投資プロジェクトを実施するか否かを判断するための方法として、回収期間法、正味現在価値法（NPV法）、内部利益率法（IRR法）の三つがあり、今回はそれら方法の比較を行う。具体的な数値例を用いてそれぞれの特徴を述べた後に、NPV法が最も優れている理由について説明し、さらにはNPV法とIRR法について、要求収益率との関係性から説明する。

8. 体内時計と時計遺伝子

京都大学薬学部2年
宮崎 結生

夜寝て朝覚醒というリズム形成は体内時計すなわち時計遺伝子が関与しており、また、一日の間での体内物質質量変化は病気発症や薬物効果に時間差という影響を及ぼす。これを利用した治療法がクロノセラピーである。加えて、夜中でも明るい光にさらされることが多い現代では、体内時計の乱れから生活習慣病などの現代病を引き起こす原因ともなり、このように病気発症や治療、さらには創薬作用点からみて重要とされる体内時計や時計遺伝子について紹介する。

9. 気候変動と皮膚がん

大阪公立大学医学部医学科1年
牛島 陸斗

【目的】大きな気候変動と皮膚がん罹患率上昇の間の相関性について調べることを目的に研究を行った。【方法】医学文献検索エンジンPubMedの論文の中から明らかに無関係なものを除いて分析した。【結果】皮膚は環境の影響を最も受けやすい組織であり、中でも皮膚疾患は気候の影響を受けやすく、また、皮膚がんのリスクとしては紫外線曝露が最も重要であることが分かった。【考察】今後、気候変動への対策が必要不可欠である。

10. 文化鑑定 ―先住民族の権利を保障する―

大阪大学法学部国際公共政策1年
郭 嵩

南米における先住民族の権利保障は裁判での大きな課題であったため、先住民族の権利保障を促すために文化鑑定という司法鑑定制度が導入された。文化鑑定は様々な問題点が指摘されている一方、公平な裁判に導くことができるという利点がある。日本にはない制度の文化鑑定について、その実施例や制度に対する評価、課題など、授業で教わったことや担当教員の論文をもとに考察を交えながら発表し、文化鑑定とは何かについて皆様と共有したい。

11. 掻破行動の発生における脳内メカニズム

大阪大学薬学部薬学科1年
堺 梨紗

人は誰しも痒みを感じることがあります。掻いてはいけませんが、どうしても掻いてしまうという経験をしたことはありませんか？このような「掻く」行動、すなわち掻破行動が起こる原因には、実は脳のある神経回路が関係しているのです。また痒みのなかでも、時間が経つと収まるものもあれば、アトピーのように繰り返し、痒みを感じるものもあります。なぜそのような違いが生じるのかについて、脳内神経伝達をもとに発表します。

12. バイオミメティクスの世界

大阪大学工学部応用理工学科1年
東 開土

受講科目「応用理工学序論」でバイオミメティクス(biomimetics)について発表しました。バイオミメティクスは生物模倣とも呼ばれ、生物の体型、機能、行動などを模倣して活用しようとする技術です。生物が現在の姿を持ち、飛行や

遊泳といった行動を示すのは何らかの理由をもって進化してきた結果であり、それらを利用して機械などの人工物をより良いものにしようとするバイオミメティクスについて、その考え方やアイデアを紹介します。

九州地区後期第1回研修会 令和4年10月8日

1. ダイオキシンによる次世代影響の機構解明に向けて

九州大学薬学部創薬科学専攻細胞生物薬学分野1年
藤本 茉奈

私は、環境汚染物質であるダイオキシンの次世代への影響について調べ、未来の健康指針を作ることを目的に研究を行っています。妊娠ラットへの比較的低用量ダイオキシン投与後に採取した組織を用いて、現在は全ゲノムメチル化解析によるデータをもとに各遺伝子の発現等を詳しく調べています。遺伝子発現における様々な経路や種々の分子量の定量等を通して、ブラックボックス状態の現状を一つ一つ明らかにする中で、現段階で得られた成果を紹介します。

2. 持続可能な地域にするために

九州大学法学部4年
首藤 春風

「都市と地方の格差」や「地域振興」が叫ばれるようになって長年が経ち、国においても地方自治体においても様々な施策が打ち出されています。そのような中で、地域が自立し持続するために必要とされているのが「地域経済循環」です。今回は地域経済循環とはどのような概念なのか、地域経済循環を向上させるために何が必要なのか等を説明したいと思います。地域や地元について考えるきっかけになればいいなと思います。

3. 正直者が得をするルールとは

九州大学工学部電気情報工学科計算機課程4年
横山 健

社会的に要請される性質を満たすルールを作ることを目的とするメカニズムデザインでは、不正操作に強く不満を持つ人がいないようなルールを作ることが求められる。今回の発表では、正直者が得をするルールとは何かを説明し、このようなルールは不正操作に対して強いことを研究室配属問題を例にとりて解説する。また、メカニズムデザインの応用例や計算機科学との関連性についても紹介し、この発表が現状のルールや規則を考えるきっかけになればと思う。

4. 樹脂を用いた簡易補修がアルミニウム合金の疲労寿命に与える影響

熊本大学工学部材料応用化学3年
植木野 介子

現在、橋梁などの構造物の老朽化が問題視されています。そこで近年では、構造物の一部をアルミニウム合金に置き換えることで負荷重量を低減させ長寿命化させることが注目されています。しかし、アルミニウム合金に置き換えたとしても、老朽化した際には補修が必要となります。今回の研修会では私の高専時代の研究テーマである、「樹脂を用いた簡易補修がアルミニウム合金の疲労寿命に与える影響」について発表させていただきます。

5. 徒然なるままに、人生を考察すれば

九州大学医学部医学科1年
難波 陽生

人間誰しも一度は抱くであろう、「人生とは何なのか」「人生をどう生き、どう終わるべきか」という疑問。特に、患者さんの人生に携わる医師を目指す者としては、この疑問とは生涯を通じて向き合い続けることとなる。そこで私は、死についての考察が描かれている古典「徒然草」を読み解き、作者・兼好の核となる思想「無常」について考察した。この世が無常であることを悟れば、過度な執着を捨て、ありのままの人生を生きることができるのである。

6. CanSatにおける画像認識の活用

九州大学工学部I群
吉田 遼太郎

【目的】小型模擬人工衛星であるCanSatにおけるゴール検出を画像認識すること。【方法】マイコンにカメラを付けてプログラミング言語pythonで書いたコードから、OpenCV（画像処理用ライブラリ）を使って画像データを取得し、画像上でどの位置に赤色（ゴールの色）があるかによってゴール検出を行った。【結果】ゴール検出に成功したが、光加減によって赤色判定が変わることが分かった。【考察】光の安定した範囲を見つけることが課題である。

九州地区後期第2回研修会 令和4年11月12日

1. 緑茶を飲んで認知機能の低下を防ごう！

九州大学大学院 生物資源環境科学府修士1年
松井 優樹

私は、食品の持つ新たな機能性を解明することを目的に研究を行っています。今回は、緑茶に含まれる成分が老化による認知機能の低下を抑制する作用について、そのメカニズムの点から研究成果を発表します。老齢マウスに緑茶成分を2週間経口投与し、認知機能を評価したところ、緑茶成分の投与により認知機能が向上しました。この研究を通して、今後高齢化が進む日本で認知症や老化による認知機能の低下を予防していきたいと考えています。

2. 地震波から断層の向きを知る

九州大学理学府地球惑星科学科修士1年
高山 竜之介

私は地震のメカニズムを研究していく中で、地震波のP波の最初の動きが正か負か、という点から、発生した震源地の断層の向きを求めることができることを知った。なぜこのような地震波のデータから地中深くの動きを知ることができるのかを伝えたいと思い、このテーマを選んだ。発表においては図を用いて断層の動きを示した後、その動きとP波の最初の動きが対応するという点に注目して、断層の向きを求めるメカニズムを明らかにしたい。

3. 腹を空かせた魚は戦いに弱い？ 強い？

広島大学医学部4年
田之上 絢香

多くの動物は食料や縄張り・パートナーを巡って同種間で闘争をし、勝者はそれらを優先的に得ることができますが、食料が不足している状態では闘争行動の勝敗が大きく影響されることが予想されます。今回はゼブラフィッシュ（インド原産の小型魚類）を実験モデルに、空腹状態では闘争に勝ちやすい傾向がみられるのか、また、闘争中には脳神経回路のどの部位が活性化されるのか、などについて神経生物学の観点から説明いたします。

4. 民衆の目に映る歴史 ― 二・二六事件を例に ―

九州大学文学部人文科学科4年
中田 蓮太郎

現在私たちが見る歴史が見たままの姿で語り継がれるとは限らない。今なお語り継がれる歴史の多くは、当時、力を持っていた人物が残した記録などに拠るものである。民衆は歴史を構成する重要な存在でありながら、民衆の存在そのものや視点が歴史の表舞台に登場することはほとんどない。そこで今回は、西南戦争以来の最大の国内事件であると称される二・二六事件を例に、民衆の目に映る歴史について、当時の新聞や日記などから検討することを試みる。

5. 耳つき計算機、メモを取る ―機械学習を用いた音声認識―

九州大学工学部電気情報工学科2年
工藤 雅人

昨年度から行っているプログラミング言語 Python を用いた音声認識の自主研究について、認識精度向上のために前回の考察に従って事前データの処理や異常個所の検出を行い、さらに機械学習による新たなアプローチであるフォルマント分析を試みました。結果、母音発声に関して前回よりも高精度の判定を実現することができ、またそれら結果から、機械学習に適したデータの成型工程が精度向上に大きな影響を与える可能性について考察を加えました。

6. 「大元帥」と「無答責」のはざままで

九州大学文学部人文科学科1年
國崎 康平

このタイトルによってまず想起させられるのは、現代に生きる私たちにとって、昭和天皇と（アジア・）太平洋戦争でしょう。ですが今回は『明治天皇紀』を史料として、明治天皇主体の日清・日露戦争について考察します。『明治天皇紀』は史料としての限界があり、加えて戦争指導における明治天皇の役割は枝葉末節に過ぎないかもしれません。しかし、それを紐解くことによって、教科書からは窺えない明治天皇の一面が浮かび上がってくると考えています。

7. 離島医療の持続可能性

長崎大学医学部1年
林 宏樹

東京一極集中が進む現在の日本社会において、都市部が栄える反面、その影となりつつある地域社会。特に深刻さが増しているのは離島である。しかしながら、衰退していく離島が多い中でも、行政・民間が上手く連携し、持続可能性を見出している地域もある。私が同行した離島視察から学んだことを踏まえ、離島を含めた地域社会の持続可能性について医療の観点から考察するとともに、さらに今後の地域医療の展望についても考えてみたい。

8. 気候変動と皮膚がん

大阪公立大学医学部1年
牛島 陸斗

【目的】大きな気候変動と皮膚がん罹患率上昇の間の相関性について調べることを目的に研究を行った。【方法】医学文献検索エンジンPubMedの論文の中から明らかに無関係なものを除いて分析した。【結果】皮膚は環境の影響を最も受けやすい組織であり、中でも皮膚疾患は気候の影響を受けやすく、また、皮膚がんのリスクとしては紫外線曝露が最も重要であることが分かった。【考察】今後、気候変動への対策が必要不可欠である。